

仙台市文化財調査報告書第194集

宮城県仙台市

郡山遺跡XV

—平成6年度発掘調査概報—



1995.3

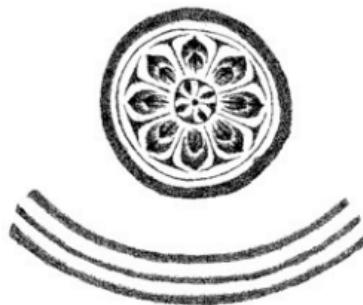
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第194集

宮城県仙台市

郡山遺跡XV

—平成6年度発掘調査概報—



1995.3

仙台市教育委員会

序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は15年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じております。これは古代史・考古学等の識者のみならず、市民の皆様方に御承知のことと存じます。

幻の城柵としての一端をあらわした昭和54年以来、継続的に進められてきた発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として、私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙跡・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度の調査ではII期官衙の建物跡などが発見され、II期官衙政庁の様相が次第に明らかにされつつあります。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にあります。そのような中にあって、継続的な調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くの御協力と御支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成7年3月

仙台市教育委員会

教育長 坪 山 繁

例 言

1. 本書は郡山遺跡の平成6年度範囲確認調査の概報である。
2. 本調査は国庫補助事業である。
3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 長島栄一 I、II、IV、VI、VII・1、VIII

熊谷裕行 III、V、VII・2

遺構トレース 普井百合子、日比野園子、岡まり子

遺物実測 普家婦美子、吉田りつ子、伊勢多賀子、岡

遺物トレース 普井、日比野、普家、岡

遺構写真撮影 長島、熊谷

遺物写真撮影 長島

遺物補修復元 赤井沢千代子、洞口れい子、佐藤栄子

図版作成 長島、熊谷、普井、普家、吉田、伊勢、佐藤、岡

編集は長島・熊谷がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo1原点(X=0、Y=0)とし、高さは標高値で記した。
5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。
6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

| | | | | | |
|-----|--------|-----|------------|-----|---------|
| S A | 柱列などの跡 | S E | 井 戸 跡 | S X | その他の遺構 |
| S B | 建 物 跡 | S I | 竪穴住居跡・竪穴遺構 | P | ピット・小柱穴 |
| S D | 溝 跡 | S K | 土 坑 | | |

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

| | | | |
|---|-------------|---|---------|
| C | 土師器(ロクロ不使用) | G | 平瓦・軒平瓦 |
| E | 須 惠 器 | K | 石 製 品 |
| F | 丸瓦・軒丸瓦 | N | 金 属 製 品 |

8. 遺物実測図の網スクリーントーン張り込みは黒色処理を示している。

9. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(古山・佐藤:1970)を使用した。

目 次

| | |
|------------------|----|
| 序 文 | |
| 例 言 | |
| I はじめに | 1 |
| II 調査計画と実績 | 2 |
| III 第102次発掘調査 | 4 |
| 1. 調査経過 | 4 |
| 2. 発見遺跡・出土遺物 | 5 |
| 3. まとめ | 13 |
| IV 第103次発掘調査 | 15 |
| 1. 調査経過 | 15 |
| 2. 発見遺跡・出土遺物 | 15 |
| 3. まとめ | 26 |
| V 第104次発掘調査 | 29 |
| 1. 調査経過 | 29 |
| 2. 発見遺跡・出土遺物 | 31 |
| 3. まとめ | 36 |
| VI 第105次発掘調査 | 40 |
| 1. 調査経過 | 40 |
| 2. 発見遺跡・出土遺物 | 40 |
| 3. まとめ | 41 |
| 調査成果の普及と関連活動 | 43 |
| VII 総括 | 44 |
| VIII 第3次5カ年調査の総括 | 53 |
| 写真図版 | |

I はじめに

平成6年度は郡山遺跡範囲確認調査第3次5カ年計画の5年目にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

文化財課 課長 白鳥良一

管理係 係長 千葉晴洋

主任 村上道子

主事 福井健司

主事 斎藤英治

調査第一係 係長 田中則和

主査 木村浩二

主事 長島栄一

教諭 熊谷裕行

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北大学工学部名誉教授 建築史）

副委員長 工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授 考古学）

岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授 考古学）

須藤 隆（東北大学文学部教授 考古学）

進藤秋輝（宮城県多賀城跡調査研究所長 考古学）

今泉隆雄（東北大学文学部助教授 歴史学）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

地権者 斎藤長也、小林廣志、小林つめ子、三倉産業株式会社、庄子都代子、

赤井沢久治

調査参加者 赤井沢きすい、赤井沢サダ子、赤井沢千代子、安齊直子、伊勢多賀子、伊勢みつ、伊藤貞子、大友節子、岡まり子、尾形陽子、小嶋登喜子、菅家婦美子、工藤ゑなよ、小池房子、小林テル、佐々木直子、佐藤栄子、菅井百合子、高橋ヨシ子、千田あや子、日比野櫻子、洞口れい子、牧かね子、吉田りつ子

II 調査計画と実績

平成6年度の発掘調査は、平成2年度から始められた「郡山遺跡範囲確認調査」第3次5ヶ年計画案にもとづく第5年次目である。計画案によれば今年度はII期官衙と同時期の郡山廃寺中権伽藍東部の調査予定であったが、仙台市が計画している再開発事業との関連から平成4、5年度に引き続き、I期官衙の南西部へと調査地点を変更したものである。このことについては平成5年度の調査指導委員会で了承を得ている。発掘調査費についても国庫補助金の内示をうけた（総経費1,700万円、国庫補助金額850万円、県費補助金額425万円）ことから、次のような実施計画を立案した。

表1 発掘調査計画表

| 調査次数 | 調査地区 | 調査予定面積 | 調査予定期間 |
|-------|----------|-------------------|--------|
| 第102次 | II期官衙中央区 | 280m ² | 6月 |
| 第103次 | I期官衙西部区 | 400m ² | 7月～9月 |
| 第104次 | I期官衙西部区 | 100m ² | 9月 |
| 計 | 3地区 | 780m ² | 6月～9月 |

またこの他に関連遺跡の遺構確認調査として、「仙台平野の遺跡群」の中で燕沢遺跡の調査も併せて立案した。

事業開始にあたり郡山遺跡内で市道拡幅工事、共同住宅の建築に伴って第101次、第105次、第106次調査を追加して実施した。このうち市道拡幅工事に伴う第101次、第106次調査について一連の調査が平成7、8年度も継続されるため、平成9年度にまとめて調査報告する予定である。共同住宅の建築に伴って実施した第105次調査については、仙台平野の遺跡群で対応している。しかし郡山遺跡での調査のため本概報に記載することとし、「仙台平野の遺跡群XIV」では概要のみを掲載している。また第104次調査の直前になつて隣接地で小規模な宅地造成が計

表2 発掘調査実績表

| 調査次数 | 調査地区 | 調査予定面積 | 調査予定期間 |
|-------|-----------|-------------------|--------------|
| 第102次 | II期官衙中央地区 | 280m ² | 10月3日～11月8日 |
| 第103次 | I期官衙西部地区 | 400m ² | 6月1日～10月11日 |
| 第104次 | I期官衙西部地区 | 100m ² | 7月12日～10月4日 |
| 第105次 | II期官衙東辺地区 | 40m ² | 10月3日～10月31日 |
| 計 | 4地区 | 820m ² | 6月1日～11月8日 |

画され、それについては第104次調査のC～E区として国庫補助事業とは別に対応したが、調査で検出した遺構の連続性から本概報で併せて報告する。

したがって本年度の調査概報では、第102次から第105次までの4地区の報告を掲載する。



第1図 郡山遺跡全体図

III 第102次発掘調査

1. 調査経過

第102次調査区は方四町II期官衙の中央部、推定政府域の南東付近に位置している。周辺で行われた調査には、昭和59年度の第44次調査、60年度の第51次・第55次調査があり成果があげられている。そのうち第55次調査で検出されたS A 730一本柱列は、II期官衙政府域を区画する西辺と考えられ、さらに南に隣接する第44次調査区までは延びていないことからが明らかにされている。この一本柱列が第55次調査区と第44次調査区の間で東に曲がり、政府域の南辺となる区画施設が検出されるかどうか、またII期官衙政府域の遺構が南東端部においてどのような広がりをみせるかを明らかにする目的で第102次調査を実施した。

II期官衙推定政府域内において、現時点では発掘調査を実施できる地点が極めて少ないとため、本調査区は上記の調査目的を達成するための適地である。

現況は標高10.1~10.2m程の畠地である。排土場の確保が困難であったため、西半部と東半部とに分けて調査を実施することとした。西半部は10月3日から表土排除を行った。その後遺構の検出作業に入ったが畠の耕作による天地返しを深く受け、遺構が著しく削平されていた。西半部の精査を終了し実測図作成後、埋め戻し及び東半部の表土排除を行った。東半部も同様に天地返しを受け、排土量の増加が明らかとなつたため調査区を一部縮小して調査を実施した。西半部の調査成果を検討しながら東半部の精査を進め、遺構の全容が把握されたのは10月28日である。その後実測図を作成し、埋め戻しを含む整地作業などを行い、すべての作業を終了したのは11月8日である。



第2図 第102次調査区位置図

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡5棟、溝跡5条、竪穴住居跡1軒、土坑5基などのはか、小柱穴・ピットなどである。これらの遺構は耕作土（第I a層～III b層）直下の基本層位第IV層上面で検出されている。

S B1485掘立柱建物跡 東西2間、総長5.7m（柱間寸法266～288cm）、南北3間、総長9.6m（柱間寸法228～288cm）の南北棟の建物跡で、方向は西柱列でN-10°-Wである。柱穴は89×107×51～80cmの隅丸長方形で、柱痕跡は直径が20～26cmである。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルト、暗褐色シルト質粘土、黒褐色粘土質シルトである。

遺物は北1東3柱穴掘り方より関東系土師器壺の細片が1点、北3東3柱穴掘り方より鉄滓が少量出土している。その他、各柱穴より土師器、須恵器の細片が少量出土している。

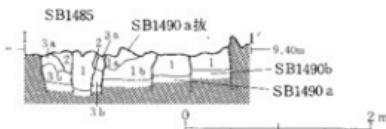
S B1490 a・b およびS B1500掘立柱建物跡、S D1512・1521溝跡を切っている。

S B1490 a・b 掘立柱建物跡 東西4間以上、総長8.3m以上（柱間寸法245～267cm）、南北2間、総長5.3m（柱間寸法260～265cm）の東西棟の建物跡で、方向は北柱列でE-3°-Sである。柱穴は108×183×80～113cmの隅丸長方形で、柱痕跡は30～32cmである。また柱の深さは検出面より75cm以上に及ぶものもある。柱穴の埋土はa建物跡が褐灰色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト、b建物跡が暗褐色シルト質粘土である。a建物跡の各柱穴は柱の抜き取り穴をともなっている。また、ほぼ同位置・同規模の立て替えがあり、古い時期の柱穴をb建物跡として記載している。北1東1～4柱穴と北3東1柱穴で重複を確認している。しかし、大規模な抜き取りを受けておりb建物跡の柱穴が検出されない箇所もある。

遺物はa建物跡北2東1柱穴より須恵器壺瓶の底部片、各柱穴より土師器、須恵器の壺・甕片が少量出土している。またb建物跡北1東3柱穴よりフイゴの羽口片1点及び鉄滓が少量出土している。

S D1512・1519・1521・1522溝跡、S I1495竪穴住居跡、S K1522土坑を切り、S B1485掘立柱建物跡、S D1511溝跡、S K1513土坑に切られている。

S B1500掘立柱建物跡 東西2間以上、総長3.6m以上（柱間寸法170～183cm）、南北4間以上、総長8.2m以上（柱間寸法205～211cm）の南北棟の総柱建物



| 遺構 | 土 壴 | 土 穴 | 備 考 |
|---------------------|-------------|--------|--------------|
| SB1485 | | | |
| 1 | 10YR5/4 暗褐色 | 粘土質シルト | |
| 2 | 10YR5/1 暗褐色 | 柱上付シルト | に赤い黒褐色シルトを含む |
| 2.4 | 10YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 黒褐色粘土質シルトを含む |
| 3 b | 10YR3/2 暗褐色 | シルト質粘土 | 泥化物を含む |
| SB1490a 抜き取り | | | |
| 1 a | 10YR3/2 黑褐色 | シルト質粘土 | 泥化物を含む |
| 1 b | 10YR3/2 暗褐色 | シルト質粘土 | に赤い黒褐色シルトを含む |
| SB1490b | | | |
| 1 | 10YR4/1 暗褐色 | 粘土質シルト | 泥化物を含む |
| SB1490c | | | |
| 1 | 10YR3/4 暗褐色 | シルト質粘土 | 泥化物粘土質シルトを含む |

第3図 SB1485・1490掘立柱建物跡断面図

跡で、方向は西柱列でN-33°-Eである。柱穴の掘り方は側柱が112×116×100×116cmの隅丸方形、東柱が98×111×58×60cmの隅丸長方形で、柱痕跡は24×38cmである。柱穴の埋土は暗褐色粘土質シルト、暗褐色シルトである。側柱はそれぞれ抜き取り穴をともなっている。

遺物は各柱穴の抜き取り穴から、土師器壺・甕片が少量、須恵器壺片が1点のみ出土している。
S B1505掘立柱建物跡に切られている。

S B1505掘立柱建物跡 建物跡の南西隅の柱穴を1基検出したのみで、詳細については不明である。柱穴は60×107cmの隅丸長方形で抜き取り穴をともない、柱痕跡は22cmである。埋土は暗褐色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

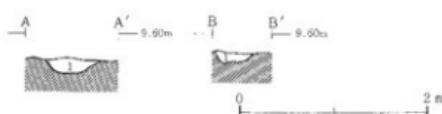
S B1500掘立柱建物跡を切っている。

S D1511溝跡 上幅20~58cm、底面幅7~26cm、深さ2~15cm、断面形はU字形の溝跡で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。方向はN-12°-Eで、検出した北端から8.6m南へ延び途切れている。堆積土は暗褐色シルトである。

遺物は土師器甕片が少量、須恵器甕片が2点のみ出土している。

S B1490 a・b掘立柱建物跡、S D1512溝跡、S I 1495堅穴住居跡を切っている。

S D1512溝跡 上幅23~42cm、底面幅12~28cm、深さ12cm、断面形はU字形の溝跡である。底面はやや凹凸がある。方向はE-2°-Sで、調査区の西端から7.4mにわたり検出した。堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

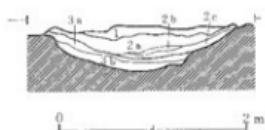


| 層位 | 土 色 | 土 性 | 特 性 |
|--------------|--------------|-----|-------------------|
| SD1511(A-A') | 10Y R3/4 灰褐色 | シルト | マンガン鉄を多量、炭化物を少量含む |
| SD1512(B-B') | 10Y R3/4 灰褐色 | シルト | 黄褐色を夾むシルトを含む |

第4図 SD1511・1512溝跡断面図

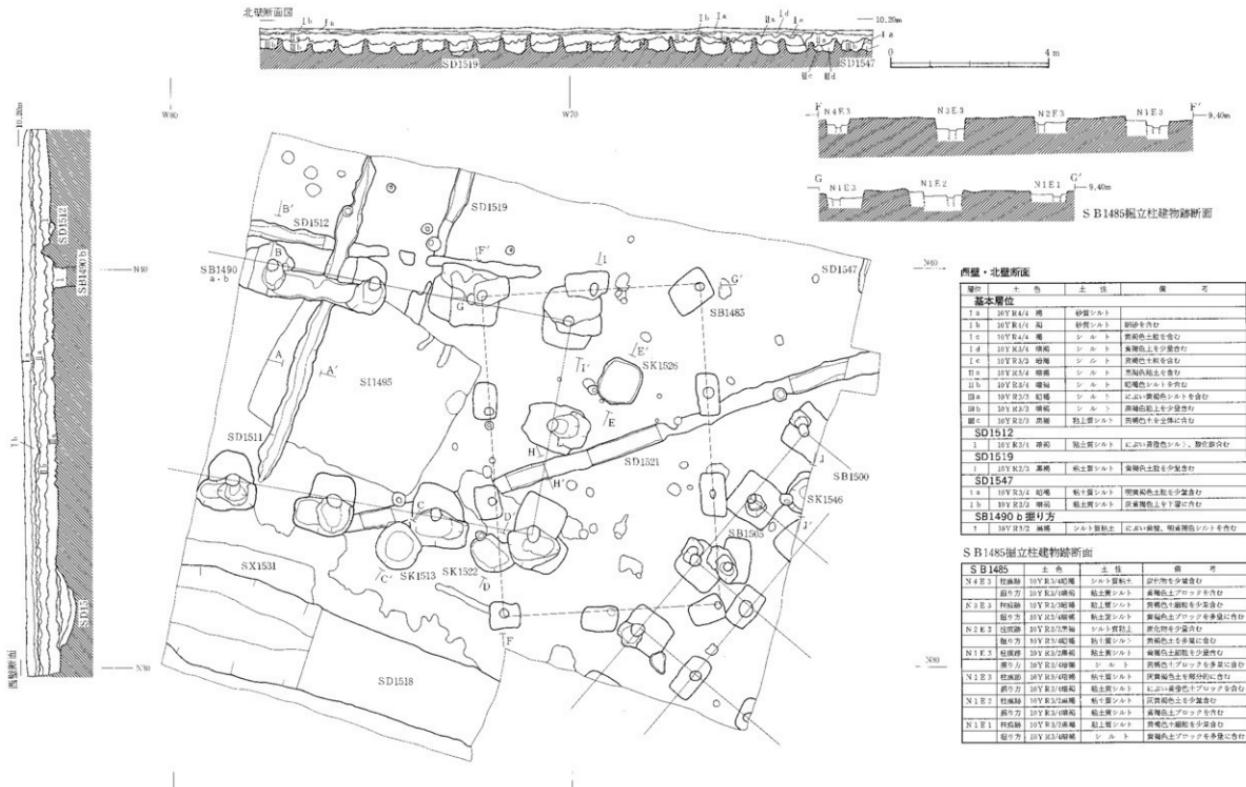
S D1519溝跡を切り、S D1511溝跡、S B1485・1490掘立柱建物跡に切られている。

S D1518溝跡 上幅180~250cm、底面幅40~104cm、深さ53~60cm、断面形はU字形の溝跡で、壁は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。方向はE-14°-Sで、調査区の南端で8.46mを検出した。堆積土は第1層が暗褐色粘土質シルト、第2層が灰褐色シルト質粘土、第3層が暗褐色シルト質粘土である。底面形状と堆積状況から新旧2時期あると考えられる。



| 層位 | 土 色 | 土 性 | 特 性 |
|-----|--------------|--------|------------------|
| 1 | 10Y R3/4 灰褐色 | 粘土質シルト | 灰褐色シルト、炭化物を少量含む |
| 2 a | 10Y R4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | にじみ灰褐色シルトを含む |
| 2 b | 10Y R4/2 灰褐色 | シルト質粘土 | 灰褐色、マンガン鉄を全層に含む |
| 2 c | 10Y R2/3 黒褐色 | シルト質粘土 | 炭化鉄、マンガン鉄を少量含む |
| 3 a | 10Y R2/3 黑褐色 | シルト質粘土 | 灰褐色、マンガン鉄、炭化物を含む |
| 3 b | 10Y R2/3 黑褐色 | 粘土 | 灰褐色、マンガン鉄、炭化物を含む |

第5図 SD1518溝跡断面図(西壁より)



第6図 第102次調査区平・断面図 (1/100)

遺物は第1層中より素焼きの土師質土器小皿が1点、釉薬の施された磁器の碗底部片が3個体分、また各層中より土師器甕が少量、須恵器甕片が1点出土している。

S X 1531を切っている。

S D 1519溝跡 上幅24~40cm、底面幅18~34cm、深さ11cm、断面形は逆台形の溝跡で、壁はやや外傾しながら緩やかに立ち上がる。削平が底面まで及ぶ箇所もある。底面はほぼ平坦である。方向はN-14°-Eである。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。

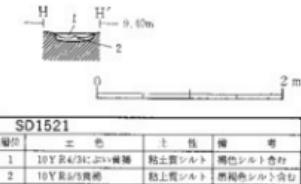
遺物は土師器甕片が1点出土したのみである。

S I 1495竪穴住居跡、S D 1512溝跡 に切られている。

S D 1521溝跡 上幅32~52cm、底面幅26~41cm、深さ6~13cm、断面形は逆台形の溝跡で、わずかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。方向はN-66°-Eで、13.96mにわたり検出した。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

S B 1485・1490a・b掘立柱建物跡、S K 1513土坑に切られている。

S D 1547溝跡 上幅18cm以上、底面幅8cm以上、深さ2cm以上の溝跡を、調査区の北東端部で0.88mにわたり検出した。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。遺構の一部のみの検出であり、詳細について不明である。遺物は出土しなかった。

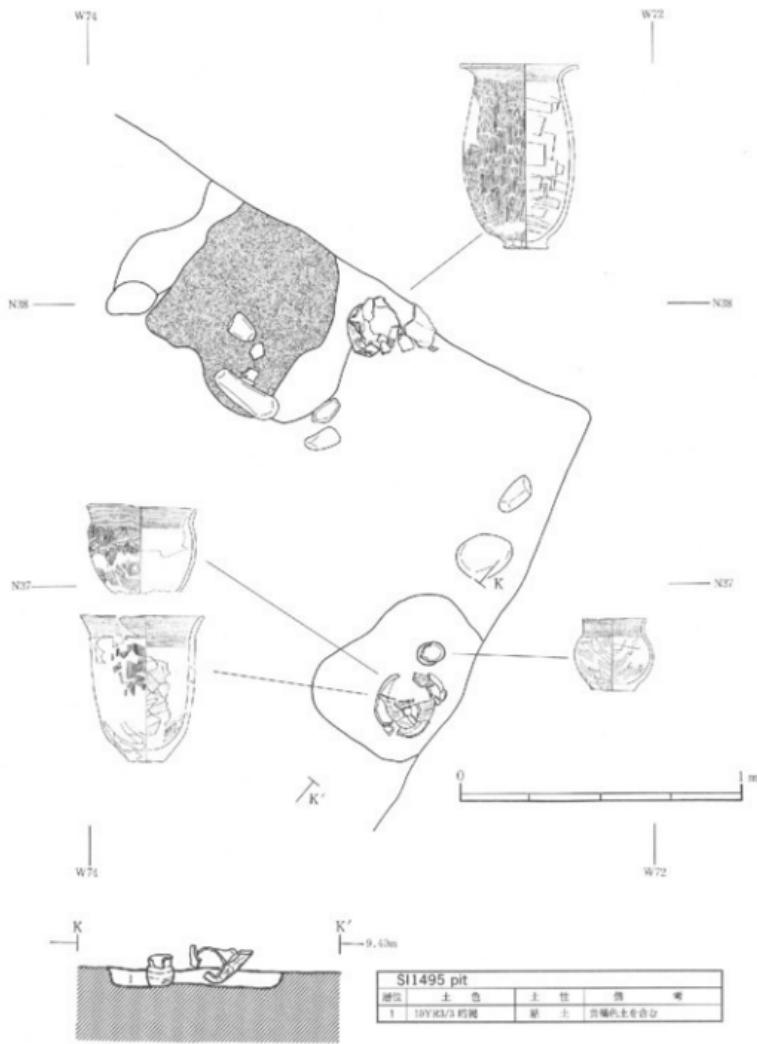


S I 1495竪穴住居跡 東西4.54m、南北4.16mの隅丸方形の竪穴住居跡である。東辺での方向はN-22°-Eである。耕作による削平が床面まで及んでおり、掘り方のみの残存である。北壁中にカマドが位置し、カマドの前面には炭化物と焼土が集積している。貯蔵穴状のピットが検出されており、長軸で64cm、短軸で44cm、深さは6cm程度である。

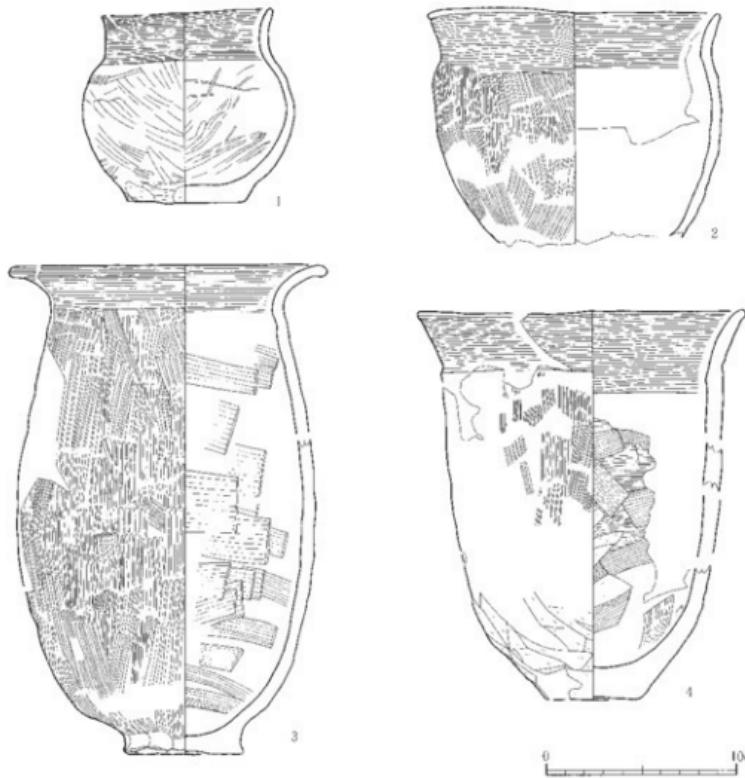
遺物はカマド周辺より土師器C-768甕(第9図3)、ピット底面より土師器C-766甕(第9図1)、C-767甕(第9図2)、C-765甕(第9図4)が出土している。このうちC-767とC-765は重なり合うような状態で出土している。したがってC-767については、底部が残存していない可能性も考えられる。

S D 1519溝跡を切り、S D 1511溝跡・S B 1490a・b掘立柱建物跡に切られている。

S K 1546土坑 長軸1.06m、短軸0.44m以上の不整の円形と推定される土坑で、深さは22cm程度である。形状は壠り鉢形で、壁は底面から緩やかに立ち上がっている。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルト、灰黄褐色粘土質シルト、褐色シルト質粘土などで、第1a層下面に灰黄褐色の火山灰を薄く層状に含んでいる。遺物は出土しなかった。



第8図 SI 1495竪穴住跡遺物出土状況



| 回数 番号 | 書 記 | 種別 | 出 土 地 点 | | | 法 面 (m) | | | 外 面 調 査 | | | 内 面 調 査 | | | 写真 図版 |
|----------|--------|---------|------------------|--------|----|------------|--------|--------|------------------|-----------|------|------------------|-----------------|--------|----------|
| | | | 地区 | 遺 構 | 断部 | 高 度 | 口 径 | 底 径 | 口 縁 部 | 外 縁 | 芯部 | L1層部 | 体 部 | 底 部 | |
| 1 | C-766 | 上部 構 | 101段 | SI1495 | PI | 12 | 9 | | ヨコナデ | ハケメ・ミガキ | タグリ | ヨコナデ | ミガキ | | 19-1 |
| 2 | C-767 | 土塁 構 | 102段 | SI1495 | PI | 12.75 | 15.3 | | ヨコナデのちハケメ | ハケメ | ヨコナデ | ハケメ | ハケメ | | 19-2 |
| 3 | C-768 | 下部 構 | 103段 | SI1495 | 床面 | 26.1 | (16.7) | 6 | ナブ | ハケメ | | ナブ | ハラナゲ | 棒状の付着物 | 19-4 |
| 4 | C-769 | 上部 構 | 104段 | SI1495 | PI | 20.75 | (17.6) | 5~5.3 | ヨコナデ | ハケメ・ハウスズリ | | ヨコナデ | ハラナゲ -棒ヘラケメリ | 木製板有り | 19-3 |

第9図 SI1495竪穴住居跡出土遺物

小ピットに切られており、S B1500掘立柱建物跡との新旧関係は明確にできなかった。

検出位置からみて、S B1505掘立建物跡の北に続く柱穴としての可能性も検討したが、形状や堆積状況から別の造構と判断した。



第10図 SK1513・1546土坑断面図

S K 1513土坑 長軸1.12m、短軸1.08mの楕円形の土坑で、深さは40cm程度である。断面形は逆台形で、壁はやや外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は灰黄褐色粘土、褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトなどである。堆積状況より、桶状の木製品が埋設されていた可能性がある。

遺物は第1層上面より木片が1点のほか、4層中より土師器壺片が2点出土している。

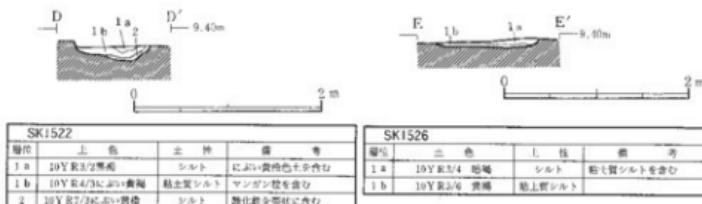
S B1490 a・b掘立柱建物跡、S D1521溝跡を切っている。

S K 1522土坑 長軸1.16m、短軸0.82mの不整の円形を呈する土坑で、深さは22cm程度である。深さ15cm程度のところで平坦になり、さらに緩やかに落ち込む底面となっている。堆積土は黒褐色シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

S K1529土坑を切り、S B1490掘立柱建物跡抜き取り穴に切られている。

SK1526 土坑 長軸0.96~1.11m、短軸0.68~0.96mの不整の楕円形を呈する土坑で、ほぼ底面まで削平されている。最も良く遺存する箇所で、深さは10.2cm程度である。堆積土は暗褐色シルト、黄褐色粘土質シルトである。

遺物は土師器壺の壺片が1点出土したのみである。



第11図 S K 1522・1526土坑断面図

3. まとめ

発見された遺構は、掘立柱建物跡5棟、溝跡5条、竪穴住居跡1軒、土坑5基、小柱穴・ピット多数などである。主な遺構の重複関係を整理すれば次のとおりである。(並列関係は、必ずしも遺構の同時性を示すものではない。)



(1) SI 1495竪穴住居跡について

S I 1495竪穴住居跡出土遺物のうち、土師器C-768甕はカマド周辺の床面から、C-766壺・767壺・765甕は貯蔵穴状ピットからの出土である。C-768甕は口縁部がくの字状に外反し、肩部中央にやや膨らみをもっている。口縁部と体部の境には明瞭な段はみられず、外面にはハケメ調整が明瞭である。C-765甕は口縁部が外傾し、肩部は底部からやや外傾しながらあがる。C-767甕は口縁部が外傾し、口縁部と胴部との境でわずかに膨らみ、底部にかけてそぼまつていく。このような特徴をもつ土師器甕は、本遺跡周辺では清水遺跡出土第IV土器群（註1）や栗遺跡第12号住居跡出土土器群（註2）などに類例をみることができる。清水遺跡第IV群・栗遺跡第12号住居跡出土土器群は、7世紀前半に比定されている。また、C-766壺と類似するものは、本遺跡第48次調査のS B597建物跡掘り方埋土（註3）からも出土している。この遺物とは内外面の調整や法量の点で違いが見い出されるが、形態的には類似するものである。第48次調査のS B597建物跡がI期官衙の建物跡であり、この掘り方埋土から出土したということは7世紀後半には存在しているとみられる。他に共伴する坏類が出土しておらず時期を特定するのは難しいが、上限を7世紀前半、下限をI期官衙造営期である7世紀後半以前とみれば、この土器群は、7世紀前半～第3四半期頃と考えられよう。

本住居跡は、II期官衙の建物跡に切られることから、7世紀末以降のものとは考えられない。出土遺物や遺構の重複関係の検討から、住居跡の年代は7世紀前半～第3四半期頃と考えられたが、官衙造営以前のものかI期官衙を構成するものかは断定できなかった。

(2) I期官衙の遺構…S B1500掘立柱建物跡

官衙内において、このような総柱の建物跡は倉庫と考えられている。第24次調査や第51次調査などでは、これらの建物跡が数棟まとまって存在することが確認されている。今回検出された建物跡も、北方の第51次調査で検出された総柱建物跡とともに、まとまりを持つ倉庫群を構成するものと考えられる。S B1500建物跡は調査区の東に延びており、これらの建物群がさらに周辺に広がっていることも考えられる。

(3) II期官衙の遺構…S B1490a・b・1485掘立柱建物跡

S B1490a・b掘立柱建物跡は、南北2間、東西4間以上の東西棟の建物跡である。この建物跡はほぼ同位置、同規模で建て替えが行われており、新しい時期の柱穴にはさらに抜き取り穴が伴っている。これまでの調査でII期官衙政庁域内では、四面廂付建物跡S B1250（正殿）やS B638・699・716建物跡などが発見されており、政庁域内の主要な建物と考えられている。S B1490建物跡の柱穴掘り方や柱痕跡は、それらと同規模のものであり、特にS B716建物跡とは掘り方の規模や柱痕跡の他、建て替えの状況などが類似するものである。よってここでは、S B1490a・b掘立柱建物跡についても、II期官衙政庁を構成する主要な建物跡とみておきたい。

S B1485掘立柱建物跡は、南北3間、東西2間の南北棟の建物跡で、方向がN-10°-Wである。他の政庁内の主要建物と考えられるものにくらべ、やや小規模な建物跡である。今回の調査では、S B1490建物跡を切って検出されている。S B1490建物跡が最終段階で抜き取りを受けていること、方向が真北から西に偏し磁北に近い振れを示していることから、II期官衙の中での変遷を示すものと考えられる。周辺の建物跡との配置関係や距離関係、方向などについては「VII総括」の中で、若干の検討を加えたい。

今回の調査では、これまで想定してきた政庁域の南辺となる区画施設は検出されなかった。これについては、来年度以降の調査成果の蓄積（註4）を待って検討していきたい。

(4) II期官衙以降の遺構群…S D1511・1518溝跡・S K1513土坑

遺構の重複関係から、II期官衙の時期より新しい遺構と考えられる。このなかでS D1518溝跡については、第55次調査で検出されたS D710溝跡と方向が類似している。遺物からも陶磁器類が出土している点で、共通点が認められる。詳細な検討はできなかったが、中世以降の溝跡と考えておきたい。

IV 第103次発掘調査

1. 調査経過

第103次調査区は方四町II期官衙の外郭大溝の西端から、西へ100mほど離れた地区に位置している。昨年度実施した第99次調査区の北東約50mの位置にあり、I期官衙の西辺とした材木列や溝跡の延長部が検出されると推定された地点である。第99次調査区ではI期官衙の西辺における区画は明らかになったが、その内部と外部の様相の違いなどは不明であった。したがってI期官衙の西辺部における内外の遺構の状況を把握し、I期官衙の構造を解明する目的で第104次調査区と合わせて調査を実施した。



第12図 第103次調査区位置図

現況は標高9mの畠地で6月1日より表土排除を行った。表土は0.6~1mで西側ほど厚くなっている。遺構の検出をしたところ調査区の中央には、不整形で深さ1.5mの擾乱があり遺構はすべて削平されていた。またその周辺でも畠の耕作による天地返しによって、遺構の残存状況は良好ではなかった。擾乱を排除し本格的な遺構の調査を実施したのは7月以降である。また遺跡内での他の調査との兼ね合いから、一部の遺構については確認作業に留めている。発掘調査のすべてが終了したのは10月11日である。

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺物は竪穴住居跡3軒、竪穴遺構1基、溝跡14条、井戸跡1基、土坑7基、ピットなどであるが、この他にも遺構確認に留めたものがある。遺構は表土(第I層)直下の基本層位第II層上面で検出されている。

S D1509溝跡 南北に延びる溝状の遺構で、東壁でN-33°-E方向に8mほど検出した。上幅1.30~1.70m、底面幅0.20~0.70m、深さ40~50cmで、南半と北半では形状に著しい違いがある。南半では上端より深さ20cmのところで壁が直立気味になり、幅0.80mほどの布掘り状の溝跡となる。北半では深さ30cmのところで、幅の一定しない溝状の落ち込みとなる。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。

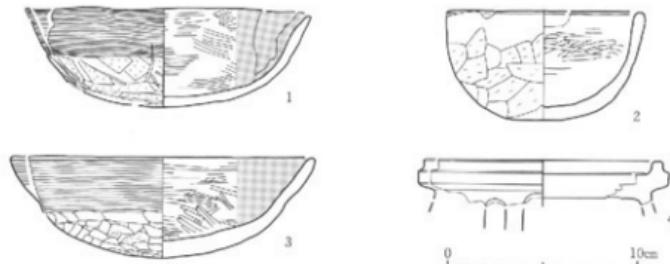
遺物は土師器壺・甕片が少量と円面鏡の小片が一点出土している。

S D1479・1481・1483・1484・1486・1487・1496溝跡、S K1498土坑を切っている。

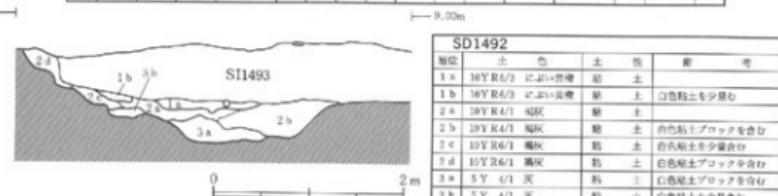
S D1492溝跡 南北方向に延びる溝跡で、西壁でN-30°-E方向に8mほど検出した。上幅1.85~2.0m、底面幅1.10~1.50m、深さ90cmで、断面形は舟底形である。底面は平坦であるが調査区の南壁ぎわでやや窪んでいる。堆積土はにぶい黄橙色、褐色、灰色粘土である。

遺物は内面黒色処理され体部外面に稜をもつ土師器C-758环（第14図1）、長方形の透かし穴があると推定されるE-372円面観（第14図4）が第1層から、楕円形の土師器C-756环（第14図2）、内面黒色処理され体部外面から口縁部にかけてやや弯曲するC-757环（第14図3）が第2層から出土している。この他にも堆積土中から土師器の壺・甕・高环・器台、須恵器の壺・蓋・高台付环の小片が多量に出土している。

S D1474溝跡を切り、S I 1493堅穴遺構、S D1478溝跡に切られている。



| 開拓番号 | 器種 | 縫合状況 | 地盤 | 出土場所 | 出土量 (kg) | 外因調査 | 内因調査 | 堆積土性状 | | | 備考 | 写真 |
|------|-------|----------|------|--------|----------|------|------|-------|-------|------|--------|-----|
| | | | | | | | | 地盤 | 堆積土性状 | 堆積土色 | | |
| 1 | C-758 | 土師環 壺 | 30次 | SD1492 | 1層 | 8.3 | 15.4 | テラコ | テラコ | 茶色 | 内面黒色処理 | 3-4 |
| 2 | C-756 | 土師環 甕 | 105次 | SD1492 | 2層 | 5.8 | 10.4 | テラコ | テラコ | 茶色 | 内面黒色処理 | 3-5 |
| 3 | C-727 | 土師環 环 | 108次 | SD1492 | 2層 | 5.4 | 15.0 | テラコ | テラコ | 茶色 | 内面黒色処理 | 3-7 |
| 4 | E-372 | 円面観 | 103次 | SD1492 | 1層 | 11.0 | | | | | | |



第14図 SD1492溝跡出土遺物・断面図



S I 1470竪穴住居跡 東西6.5m、南北6.7mで、北辺での方向はN-50°-Eである。著しく削平されており、検出面から床面まで残存する高さは2~18cmである。カマドは東壁中にあり、ソデと長さ1.8mの煙道を有している。カマド前面には炭化物が薄く堆積している。北壁中にも舌状の張り出しがあり、その中から炭化物や焼土が検出された。しかしソデの痕跡や床面上に炭化物、焼土の分布がないことから、東壁にカマドが作られる以前のカマド（旧カマド）の痕跡と考えられる。床面上からピットが検出されているが、そのうちP 1、2は配置や形態から主柱穴の可能性がある。周溝は検出されなかった。なおこの住居跡は床面までの精査にとどめている。

遺物はカマド内から土師器C-759壺（第16図2）が、床面から内面黒色処理された小形の土師器C-760壺（第16図1）、石製のK-201紡錘車（第16図3）が出土し、この他にも堆積土中や床面上から土師器の壺・壷の小片が多量に出土している。

S D 1502・1503溝跡、S K 1551土坑に切られている。



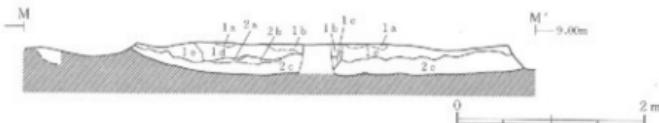
第16図 SI 1470竪穴住居跡出土遺物

S I 1475竪穴住居跡 東西4.5m、南北4.1mで、北辺での方向はN-41°-Eである。検出面から床面までの残存する高さは25~32cmである。カマドは北壁中にあり、ソデと長さ0.95mの煙道を有している。床面上には全面にわたり、炭化物が薄く堆積している。床面上からは主柱穴や周溝は検出されなかった。なおこの住居跡は床面までの精査にとどめている。

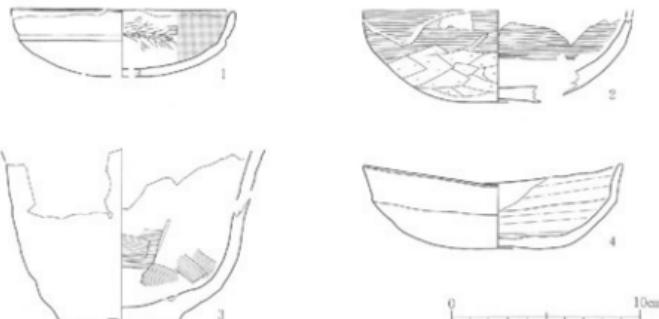
遺物は床面から内面黒色処理され、体部外側に比較的明瞭な段を有する土師器C-761壺（第17図1）、体部下半のみのC-762壺（第17図3）、やや歪みのある須恵器E-374壺（第17図4）

が、堆積土中からは内面にヨコナデの施された土師器C-763环(第17図2)、小破片ではあるがE-372円面碗が出土し、この他にも堆積土や床面上から土師器片が多量に出土している。

S D1503溝跡、S K1504土坑に切られている。



| 層位 | 土色 | 土性 | 特徴 |
|----|--------------|--------|--------------------------------|
| 1a | 10YR 4/2 黒褐色 | シルト | 酸化鉄とマンガン鉄をきびだに含む |
| 1b | 10YR 3/1 黑褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄とマンガン鉄を全体に含む |
| 1c | 10YR 3/3 黑褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄を含み、鐵を少含む |
| 1d | 10YR 3/2 黑褐色 | 粘土質シルト | 10YR 3/4C ない黄褐色土を含み、酸化鉄を全体に含む |
| 1e | 10YR 4/4 黑褐色 | 粘土質シルト | 酸化鉄を全体に含み、粘土を微量に含む |
| 2a | 10YR 3/1 黑褐色 | 粘土質シルト | 鐵土を全体に含む |
| 2b | 10YR 3/2 黑褐色 | 粘土質シルト | 10YR 3/4C ない黄褐色土を含む、炭化物を少含む |
| 2c | 10YR 4/4 黑褐色 | 粘土質シルト | 10YR 3/4C ない黄褐色土を全体に含み、炭化物を少含む |
| 2d | 10YR 3/3 黑褐色 | シルト質粘土 | 酸化鉄を全体に含み、炭化物を少含む |



| 試験番号 | 遺物番号 | 種別 | 出土場所 | | 測量(m) | 外因調査 | | | 内因調査 | | | 参考文献 |
|------|-------|----------|------|---------|-------|------|------|------|------|-----|-----|-------------|
| | | | 地区 | 遺構 | | 新規 | 既存 | 口徑 | 既存 | 口徑 | 既存 | |
| 1 | C-763 | 土師器 环 | 103次 | SI-1475 | 深窓 | 0.6 | 31.9 | | | | | 内壁に 鉄色斑紋 |
| 2 | C-763 | 土師器 环 | 103次 | SI-1475 | | 6.0 | 34.3 | 4.1 | 32.0 | 4.9 | | 10-11 |
| 3 | C-763 | 土師器 环 | 103次 | SI-1475 | 深窓 | 9.4 | | 35.0 | 32.0 | 4.9 | ヘラア | 10-11 |
| 4 | E-374 | 土師器 环 | 103次 | SI-1475 | 深窓 | 4.6 | 13.7 | | 32.0 | 4.9 | | 10-11 |

第17図 SI 1475壁穴住居跡断面図・出土遺物

S I 1480豊穴住居跡 東西4.1m、南北4.9mで、北辺での方向はN-35°-Eである。カマドは北壁中にあり、長さ1.2mの煙道を有している。なおこの住居跡は遺構の確認にとどめている。

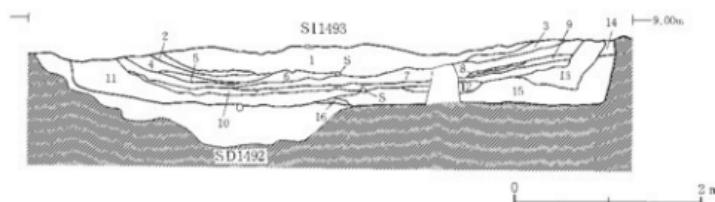
S D1502溝跡、ピットに切られている。

S I 1493豊穴造構 東西5.0m、南北2.5m、深さ35~67cmで、西辺での方向はN-37°-Eで

ある。底面は平坦で壁は直立している。堆積土は16層に細分され、上部の1層下から下部の11層上部にかけてはレンズ状に薄く堆積している。

遺物は堆積土から底面まで、土師器片が少量と須恵器片が3点のみ出土している。

S D1492溝跡、S K1497土坑を切り、S D1487・1483・1484溝跡に切られている。



| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 | 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|-----------------|--------|-------------|----|-----------------|--------|---------------|
| 1 | 10YR 5/1 黒灰 | シルト質粘土 | | 9 | 10YR 2/2 黒褐 | 粘土 | |
| 2 | 10YR 6/2 黒灰 | シルト | | 10 | 10YR 6/1 黒灰 | 粘土 | |
| 3 | 10YR 4/1 黒灰 | 粘土 | マンガン鉱を含む | 11 | 10YR 6/1 黒灰 | 粘土 | |
| 4 | 10YR 6/1 黒灰 | 粘土 | マンガン鉱を多量に含む | 12 | 10YR 4/1 黒灰 | 粘土 | 粘土・氧化物を少量含む |
| 5 | 10YR 5/4 にぶい黄褐色 | 粘土 | | 13 | 10YR 5/2 にぶい黄褐色 | 粘土 | |
| 6 | 10YR 3/1 黒褐色 | 粘土 | | 14 | 10YR 4/2 黒褐色 | シルト質粘土 | |
| 7 | 10YR 3/1 黑褐色 | 粘土 | 炭化物を少量含む | 15 | 10YR 5/1 黒灰 | 粘土 | 白色地上をブロック状に含む |
| 8 | 10YR 2/1 黑褐色 | 粘土 | | 16 | 10YR 5/1 黒灰 | 粘土 | |

第18図 SI 1493整穴邊構断面図(南壁より)

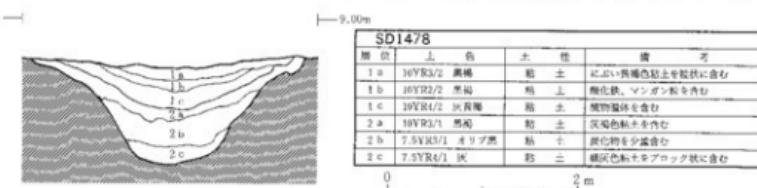
S D1474溝跡 上幅25~130cm、底面幅20~40cm、深さ4~70cmの溝跡で、検出した長さは4.4mである。断面形はU字形で、壁は緩やかに立ち上がる。方向はN-53°-Wである。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。

遺物は土師器片が少量と須恵器片が1点出土している。

S D1492溝跡に切られ、攪乱により東半が著しく削平されている。

S D1478溝跡 上幅200~210cm、底面幅30~70cm、深さ100~115cmの溝跡で、検出した長さは6.2mである。断面形は舟底形で、壁は上半部で緩やかに立ち上がる。方向はN-4°-Wである。堆積土は2層に大別され、第1層は黒褐色粘土、第2層は黒、オリーブ黒、灰色粘土である。

遺物は土師器壺・甕の小片が少量と高壺脚部片が1点、須恵器片が少量出土している。



第19図 SD1478溝跡断面図(北壁より)

S D1492溝跡を切り、搅乱により上部が削平されている。

S D1479溝跡 上幅30~40cm、底面幅16~24cm、深さ8~14cmの溝跡で、検出した長さは4mである。断面形はU字形で、壁は緩やかに立ち上がる。方向はN-52°-Wである。堆積土は褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

S D1509溝跡、S K1494土坑に切られている。

S D1481溝跡 上幅20~32cm、底面幅10~22cm、深さ4~7cmの溝跡で、検出した長さは2.5mである。断面形は扁平なU字形である。方向はN-57°-Wである。堆積土は褐色シルトである。

遺物は土師器の小片が3点出土している。

S K1497土坑を切り、S E1473井戸跡に切られている。

S D1482溝跡 上幅40~52cm、底面幅23~32cm、深さ15~20cmの溝跡で、検出した長さは5.1mである。断面形は底面に凹凸のあるU字形である。方向はN-55°-Wである。堆積土は褐色シルトである。

遺物は土師器環・甕の小片と須恵器の壺片が少量出土している。

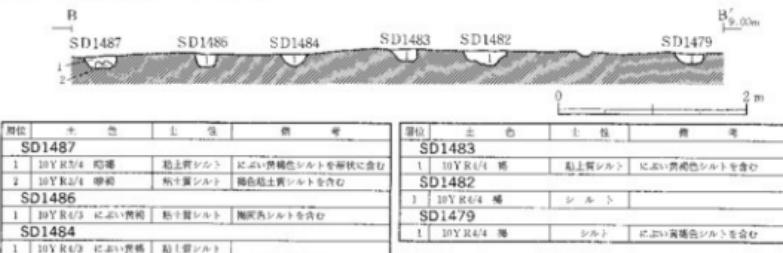
S I 1493堅穴造構、S K1497土坑を切り、S D1509溝跡に切られている。

S D1483溝跡 上幅8~40cm、底面幅2~22cm、深さ7~17cmの溝跡で、検出した長さは4.4mである。断面形は一定していない。方向はN-55°-Wである。堆積土は褐色粘土質シルトである。

遺物は土師器片が少量出土している。

S I 1493堅穴造構を切り、S D1509溝跡、S K1472土坑・1498土坑に切られている。

S D1484溝跡 上幅30~45cm、底面幅17~25cm、深さ6~14cmの溝跡で、検出した長さは3.5mである。断面形はU字形で、壁は緩やかに立ち上がる。方向はN-53°-Wである。堆積土はにぶい黄褐色土質シルトである。



第20図 SD1487・1486・1484・1483・1482・1479溝跡断面図

遺物は土師器片が少量出土している。

S I 1493竪穴遺構を切り、S D1509溝跡、S K1472土坑、P 5に切られている。

S D1486溝跡 上幅29~32cm、底面幅18~24cm、深さ10~15cmの溝跡で、検出した長さは2.5mである。断面形は逆台形で、壁は直立気味に立ち上がる。方向はN-55°-Wである。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

S D1509溝跡に切られている。

S D1487溝跡 上幅37cm、底面幅20~25cm、深さ12~14cmの溝跡で、検出した長さは1.1mである。断面形は逆台形である。方向はN-56°-Wである。堆積土はにぶい黄褐色、暗褐色粘土質シルトである。

遺物は須恵器坏片が1点出土している。

S D1509溝跡に切られている。

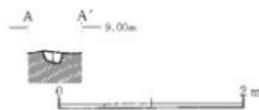
S D1496溝跡 上幅11~30cm、底面幅5~23cm、深さ10~20cmの溝跡で、検出した長さは7mである。断面形は逆台形で、壁は直立気味に立ち上がる。方向はN-36°-Eである。堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

S D1509溝跡に切られている。

S D1502溝跡 上幅24~124cm、底面幅14~54cm、深さ20~40cmの溝跡で、検出した長さは21.6mである。断面形はU字形である。方向はE-2°-Nで、西半部で北に向かいやや蛇行する。溝跡の規模や方向から、調査区西半部で検出しているS D1474溝跡に連続する可能性がある。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルト、暗褐色粘土である。

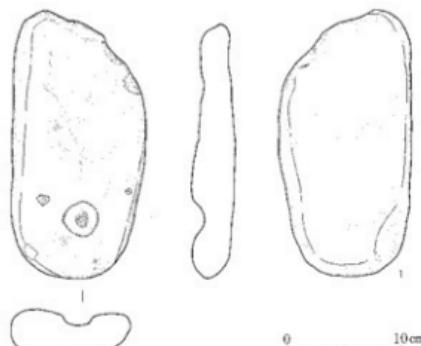
遺物は堆積土第1層からK-200凹石（第22図1）が出土したほか、堆積土中より土師器坏、甕の小片が多量に、須恵器坏、甕が少量出土している。

S I 1470・1475竪穴住居跡を切り、さらに畑の耕作時の天地返しにより上面を削平されている。



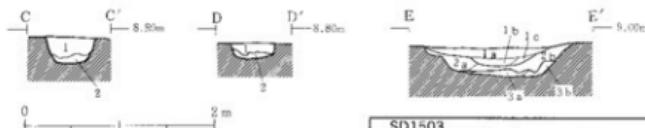
| SD1496 | | | | |
|--------|---------|----|-----|----------|
| 層位 | 土 | 色 | 性 | 質 |
| I | 10YR4/3 | 暗緑 | シルト | 強化熟多量に含む |

第21図 SD1496溝跡断面図



| 開拓 | 発 | 跡 | 種別 | 出土 地 点 | | | 特 | 記 | 写真 |
|----|-------|----|------|--------|---|----|-------------|---|----|
| | | | | 地 | 名 | 層位 | | | |
| 1 | K-200 | 凹石 | 103次 | SD1502 | | I | 表面に数箇所の円形あり | | 5 |

第22図 SD1502溝跡出土遺物



| SD 1502 | | | |
|---------|-----------------|--------------------|----|
| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
| 1 | 10Y R 4/3にぶい黄褐色 | 粘土質シルト マンガン粒を含む | |
| 2 | 10Y R 3/4暗褐色 | 粘土 マンガン粒を少量含む | |

| SD 1503 | | | |
|---------|-----------------|-----------------------|----|
| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
| 1 a | 10Y R 3/2 黑褐色 | シルト質粘土 にぶい黄褐色土を含む | |
| 1 b | 10Y R 6/2にぶい黄褐色 | 粘土質シルト 黒褐色土を中央部に含む | |
| 1 c | 10Y R 6/4 黑褐色 | シルト質粘土 褐色土を少量含む | |
| 2 a | 10Y R 3/2 黑褐色 | 粘土質シルト にぶい黄褐色土を含む | |
| 2 b | 10Y R 2/2 黑褐色 | 粘土 褐色土を少量含む | |
| 3 a | 10Y R 4/6 黑褐色 | 粘土 灰褐色土を含む | |
| 3 b | 10Y R 3/2 黑褐色 | 粘土 褐色土を含む | |

第23図 SD 1502・1503溝跡断面図

S D 1503溝跡 上幅110~170cm、底面幅30~80cm、深さ25~35cmの溝跡で、検出した長さは10.1mである。断面形は扁平な逆台形である。方向はE→E-Nである。堆積土は3層に大別され、暗褐色シルト質粘土、黒褐色粘土、褐色粘土などである。

遺物は土師器と須恵器の小片が少量出土している。

S I 1470・1475・1480 竪穴住居跡を切っている。

S E 1473井戸跡 直径75cmの円形で、深さは90cm以上である。埋土は暗褐色粘土、粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

S D 1481 溝跡を切っている。

S K 1469土坑 長軸100cm、短軸75cmの楕円形の土坑で、深さは25cmである。堆積土は灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルトである。

遺物は土師器壺・壺・須恵器壺・平瓶の小片と平行叩き目のG-66平瓦（第28図1）が出土している。

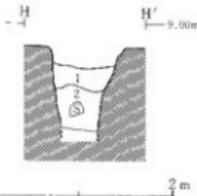
S K 1471土坑 長軸80cm、短軸40cmの円形の土坑と推定され、深さは45cmである。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。

遺物は土師器壺片が少量出土している。

S K 1472土坑 直径95cmのやや歪んだ円形の土坑で、深さは15cmである。堆積土は灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色、黒褐色粘土質シルトである。

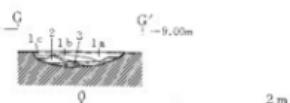
遺物は土師器壺・壺片が少量出土した。

S D 1483・1484 溝跡を切っている。



| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|---------------|-----------------------|----|
| 1 | 10Y R 3/2 暗褐色 | 粘土質シルト 褐色粘土質シルトを含む | |
| 2 | 10Y R 3/3 暗褐色 | 粘土 灰褐色粘土を含む | |

第24図 SE 1473井戸跡断面図



| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|-----|----------------|--------------------|----|
| 1 a | 10Y R 4/2 暗褐色 | シルト 酸化鉄を少量含む | |
| 1 b | 10Y R 1/2 水質褐色 | シルト 酸化鉄を少量含む | |
| 1 c | 10Y R 3/2 暗褐色 | 地土質シルト 酸化鉄を少量含む | |
| 2 | 10Y R 2/2 黒褐色 | 粘土質シルト 酸化鉄を少量含む | |
| 3 | 10Y R 4/3 黒褐色 | 粘土 酸化鉄を少量含む | |

第25図 SK 1472土坑断面図

SK1494土坑 長軸150cm、短軸100cmの不整形の土坑と推定され、深さは45cmである。堆積土は灰黄褐色、にぶい黄褐色シルト、黒褐色シルト質粘土である。

遺物は土師器の小片が1点出土している。

擾乱により削平されている。

SK1497土坑 長軸150cm以上、短軸70cmの不整形の土坑と推定され、深さは3~12cmである。遺物は出土しなかった。

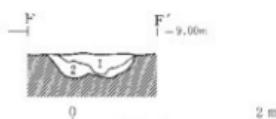
SK1498土坑 長軸40cm、短軸30cmの楕円形の土坑と推定され、深さは23cmである。堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

S D1483溝跡を切り、S D1509溝跡に切られている。

SK1504土坑 長軸110cm、短軸75cmの楕円形の土坑で、深さは30cmである。堆積土は暗褐色シルト質粘土で、多量の炭化物を含み、南壁が焼けている。

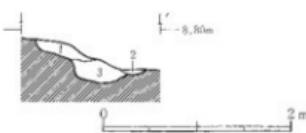
遺物は土師器壺、甕の小片が少量出土している。

S I 1475竪穴住居跡を切っている。



| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|----------------|--------|-------------|
| 1 | 10YR4/2 灰青褐色 | シルト | 堆積少量含む |
| 2 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト | マンゴン粒を多量に含む |
| 3 | 10YR4/2 黑褐色 | シルト質粘土 | 灰青褐色土を含む |

第26図 SK1494土坑断面図



| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|----------------|--------|-------------|
| 1 | 10YR4/2 灰青褐色 | シルト | マングン粒を多量に含む |
| 2 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 | シルト | |
| 3 | 10YR4/2 黑褐色 | シルト質粘土 | 灰青褐色土を含む |

第27図 SK1497土坑断面図

J J' -9.00m



| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|--------------|-----|-------------|
| 1 | 10YR4/2 灰青褐色 | シルト | マングン粒を多量に含む |

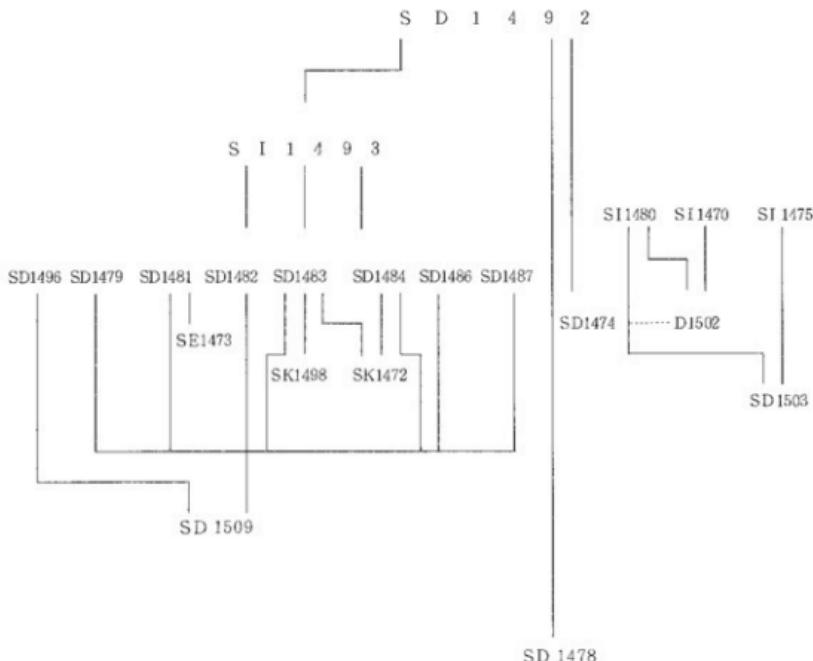
第28図 SK1498土坑断面図



第29図 SK1469土坑出土遺物

3. ま と め

発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、溝跡14条、土坑7基、小柱穴・ピットなどである。重複関係の確認された遺構を整理すれば次のとおりである。



発見された遺構には確認作業で留めたものもあり、出土した遺物から年代の検討が可能な遺構は少ない。今回の調査はⅠ期官衙の西辺部における遺構の様相を明らかにするために実施した。したがってⅠ期官衙に関連する遺構について検討する。

(1) S D 1492・1509溝跡について

S D 1492溝跡は昨年の第99次調査区で発見されたⅠ期官衙西辺のS A1430材木列や、S D 1429・1394溝跡の延長上の位置で検出された。出土した遺物には土師器C-757・758环があり、内面黒色処理され体部から口縁部にかけて丸味を持ちながら外傾する特徴を有している。またこれらの遺物と共に橢型のC-756环も出土している。このような器形の土師器が共伴して出土

した例としては、仙台市栗遺跡第12号住居跡（註5）や、名取市清水遺跡第42号住居跡第3層出土の土器（註6）がある。それらは上記のような特徴の土師器の他に、より古い要素と考えられる体部から口縁部にかけて外反する土師器坏が共に出土し、7世紀前半代の土器群と考えられている。S D1492溝跡出土の土器群は栗田式期でも古い段階のものが含まれていないことから、ここでは7世紀後半代とみておきたい。

昨年の第99次調査区で発見されたI期官衙の西辺としたS D1394溝跡は深さ90cmで、上幅が3.2~3.8m、底面幅が1.4mであった。今回検出したS D1492溝跡は上端が別の造構や擾乱によって削平されているため明らかではないが、断面の形状や規模がきわめて類似している。S D1394溝跡の延長上にも位隣していることから、連続しているものとみられる。

調査区の西端で検出されたS D1509溝跡は、底面の形状が調査区中央で大きく変化している。南半部では布掘り状となり平坦であるが、北半部では幅や底面の形状が一定していない。年代の検討が可能な遺物は出土していないが、造構の方向がN-33°-Eである（註7）ことから、I期官衙を構成する造構と考えられる。昨年の報告の中で検討したが、これまでI期官衙の溝跡としたものの中、材木列の抜き取りによって材木痕跡が全く検出されないものがあることが明らかとなっている。S D1509溝跡についても、一般的な溝跡とは考えがたく、材木列の抜き取り溝跡と見ておきたい。抜き取り作業が一定区間ごとに実施され、その区間によって抜き取りの手法に違いがあったとすれば、S D1509溝跡のように大きく形状の変化したことも理解されよう。

以上のように今回検出したS D1492溝跡・1509溝跡は、I期官衙の西辺部における区画施設やそれに関連した造構と考えられる。第99次調査では溝跡2時期（S D1429・1394）→材木列（S A1430）→材木列抜き取り溝という4時期変遷をしていた。それらとの関係についてはさくらに次章の第104次発掘調査と合わせて、「VII総括」において検討する。

(2) S I 1470・1475・1480竪穴住居跡について

竪穴住居跡はS I 1470・1475・1480竪穴住居跡の3軒が検出された。

S I 1475竪穴住居跡では床面から土師器のC-761坏・C-762壺、須恵器のE-374坏が出土している。土師器C-761坏は小型で、体部外面に比較的明瞭な段を有するものである。同じ特徴を有する土師器坏はこれまでの本遺跡の調査でI期官衙のS I 412住居跡、S D 552溝跡や、II期官衙外郭大溝であるS D 35溝跡などから出土している。したがってこれらの土師器坏類は、7世紀後半代から8世紀初期のものと考えられる。また須恵器E-374坏は体部外面に明瞭な段を有し、内面にも稜が形成されている。底部は手持ちヘラケゼリが施され平底風となっている。同様の特徴を有するものには名取市清水遺跡の第V群とした須恵器坏のなかに含まれており（註8）、年代は7世紀中葉から後葉としている。また、福島県相馬市善光寺遺跡の3形式の坏

F類、あるいは4形式の坏G類したものに類似し、年代は7世紀後半代でも第3四半期を中心とした時期に位置付けている(註9)。したがって本遺跡でも7世紀後半代でも末葉までは降らないものと考えられ、S I 1475堅穴住居跡はI期官衙段階の遺構とみられる。

S I 1475堅穴住居跡と近接して、S I 1480堅穴住居跡がある。遺構確認を行ったのみで出土遺物の検討が出来ないが、遺構の配置はS I 1475堅穴住居跡と西辺を揃え、煙道の方向や長さでも共通した点がある。方向もS I 1475はN-41°-E、S I 1480はN-35°-Eとなっており、これまでI期官衙としてきた遺構の方向の範囲(註10)に収まっている。この2軒の堅穴住居跡については同時に存在していたとは考え難いが、方向性からみて、いずれもI期官衙を構成していたものとみておきたい。

S I 1470堅穴住居跡については、S I 1475・1480と同じようにI期官衙を構成していたものかどうかについては、方向に違いがあることから断定できない。しかし出土遺物からはおおむね7世紀の後半代と考えられることから、I期官衙に含まれる可能性が高い。

V 第104次発掘調査

1. 調査経過

第104次調査区は方四町II期官衙の外郭大溝南西隅より、西へ140m程離れた地区に位置している。平成5年度に実施した第99次調査区の北に隣接した箇所である。周辺で行われた調査には第100次調査(平成5年度)・第96次調査(平成4年度)などがあり、I期官衙の南西部における遺構の抜がりが次第に明らかにされてきている。第100次調査ではII期官衙の材木列(S A1445・1440・1435)が北に延びること、I期官衙の材木列(S A272)が通過することが確認された。第99次調査では第100次調査のS A272材木列に対応するとみられるS A1430材木列が検出された。このS A1430材木列は、規模と位置からI期官衙の南西部における西辺

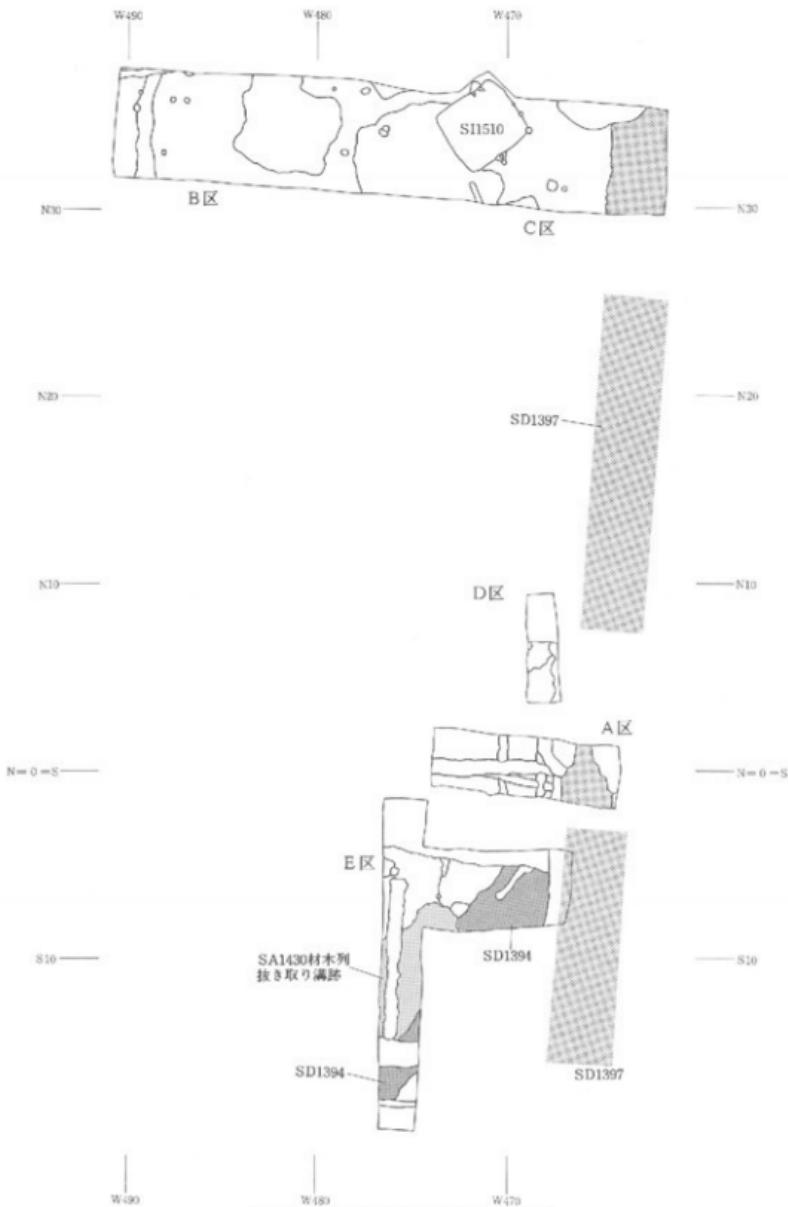


第30図 第104次調査区位置図

となっていると考えられた。また、同位置で新旧2時期の溝跡も検出され、I期官衙の西辺がある時期には溝で区画されていた可能性についても考えられた。今年度はこれらの遺構がどのように北に延びるのか、さらに区画の内側と外側の遺構の様相を明らかにする目的で調査を実施した。

また第104次調査の実施直前になって、隣接地で小規模な宅地造成に伴う発掘届が提出された。これについては原因者である福仙興業株式会社との協議により、第104次調査C~E区として国庫補助事業(A・B区)とは別に対応している。なお調査報告に関しては、検出した遺構の連続性を考慮して本概報において併せて掲載することとした。

現況は標高8.9m~9.5m程の畠地である。7月12日から表土排除を行い、A~E区を設定した。耕作土の厚さは0.40~0.92mで、北側で表土が厚く堆積している状況であった。昨年度の調査成果を踏まえながら調査を進め、遺構によっては確認作業にとどめたものもある。9月20日に郡山中学校の遺跡見学会を実施し、調査成果の普及に努めた。実測図の作成、埋め戻しなどすべての作業が終了したのは10月4日である。



第31図 第104次調査区配置図 (1/300)

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡4軒、溝跡14条、土坑3基、小柱穴・ピットなどである。これらの遺構は耕作土（第Ia層～IIIh層）直下の基本層位第IV層上面で検出されている。調査区のうちB～E区については遺構を確認したにとどめている。

○A区

S D1393溝跡 上幅88～122cm、底面幅25～48cm、深さ22cm、断面形はU字形の溝跡で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸がある。方向はN-6°-Wで、D区まで延びている。堆積土は第1層が灰黄褐色シルト、第2層がにぶい黄橙色砂質シルトで灰白色火山灰を含んでいる。遺物は土師器壊片が2点、甕片が1点出土している。

S D1397・1507・1508溝跡を切り、S K1491土坑に切られている。

S D1397溝跡 上幅228cm以上、底面幅136～160cm、深さ74～118cm、断面形は逆台形の溝跡で、壁は底面に対してやや外傾しながら立ち上がり、底面は平坦である。方向はN-3°-Wで北方のC区でも検出され、さらに調査区外に延びている。堆積土は灰黄褐色粘土質シルト、褐灰色粘土などを主体とし、特に第3層では植物遺体を多く含み、黒褐色粘土と互層をなしている。

遺物は第1層より内外面黒色処理された土師器壊の細片が1点、甕片少量、第2層より土師器壊・甕片が少量、須恵器甕片2点・蓋片1点、第3層より土師器壊・甕片が少量出土した。

S D1393溝跡、S K1491土坑に切られている。

S D1499溝跡 上幅30～52cm、底面幅16～50cm、深さ11～13cm、断面形は一定していないがほぼ逆台形の溝跡である。底面はやや凹凸がある。方向はN-6°-Wで、3.04m程を検出した。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。

遺物は土師器壊片が2点出土したのみである。

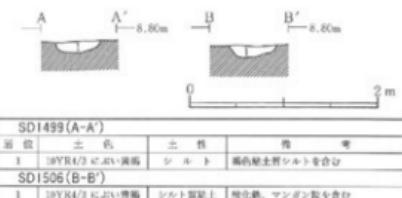
S D1507・1508溝跡を切っている。

S D1506溝跡 上幅36～52cm、底面幅23～34cm、深さ11～14cm、断面形は一定していないが逆台形に近く、底面はやや凹凸がある。方向はN-4°-Wで、2.40m程を検出した。堆積土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。

遺物は土師器壊・甕の細片が少量と青磁鉢の細片が1点出土している。

S D1507・1508溝跡を切り、S K1491土坑に切られている。

S D1507溝跡 上幅68～95cm、底面幅30～52cm、深さ20～26cm、断面形は逆台形で、壁は底面に対してやや外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。方向はE-5°-Nで、6.5m



第32図 SD1499・1506溝跡断面図

| SD1499(A-A') | | | |
|--------------|---------------|--------|--------------|
| 層級 | 土色 | 土性 | 備考 |
| I | 3BYR1/2に近い黄褐色 | シルト | 褐色火山灰シルトを含む |
| SD1506(B-B') | | | |
| I | 3BYR4/2に近い黄褐色 | シルト質粘土 | 炭化鉄、マンガン鉱を含む |

程を検出した。堆積土は暗褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色シルト質粘土、褐灰色粘土である。

遺物は土器器坏・甕の細片が少量出土している。

S D1508・1393・1499・1506溝跡を切り、S K1491土坑に切られている。

S D1508溝跡 上幅36~44cm、底面幅23~28cm、深さ11~18cm、断面形は逆台形で、壁は底面に対してやや外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

方向はE-7°-Sで、3.8m程を検出した。堆積土は灰黄褐色粘土質シルト、灰黄褐色シルト質粘土である。

遺物は土器器壞片が1点、焼けた礫が1点出土している。

S D1393・1499・1506・1507溝跡に切られている。

S K1491土坑 直径400cm程の円形の土坑と推定され、深さは70~84cm程である。形状はほぼ鉢形を呈しているが、深さ28cm程のところで段を形成し、緩やかに底面に続いている。堆積土は灰黄褐色シルト質粘土、褐色シルト質粘土、オーリープ黒色粘土、灰色粘土である。

遺物は第3層より土器器坏・甕片が少量化出土している。

S D1393・1397・1506・1507溝跡を切っている。

○B・C区

S D1534溝跡 上幅36~48cm程の溝跡を、調査区の北西端部で3m程にわたり検出した。方向はE-14°-Nである。

S D1536溝跡を切っている。

S D1536溝跡 上幅68~112cm程の溝跡を、調査区の西端部で5.6mにわたり検出した。方向はN-1°-Wであるが、緩やかに曲がりながら調査区外に延びている。

S D1534溝跡に切られている。

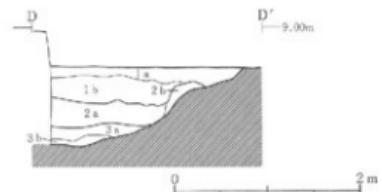
S I 1510竪穴住居跡 東西3.38~3.76m、南北3.40~3.68mの隅丸方形の竪穴住居跡であ



| SD1507 | | | |
|--------|-------------|------------------------|----|
| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
| 1 a | 10YR5/7 壊場 | シルト質粘土 鐵化鉄、マンガン鉄を含む | |
| 1 b | 10YR5/7 反青面 | シルト質粘土 マンガン鉄を多量に含む | |
| 1 c | 10YR4/7 壊場 | 粘土 にぶい黃褐色シルト質粘土を含む | |
| 1 d | 10YR4/7 壊場 | 粘土 にぶい黃褐色粘土を認測に含む | |

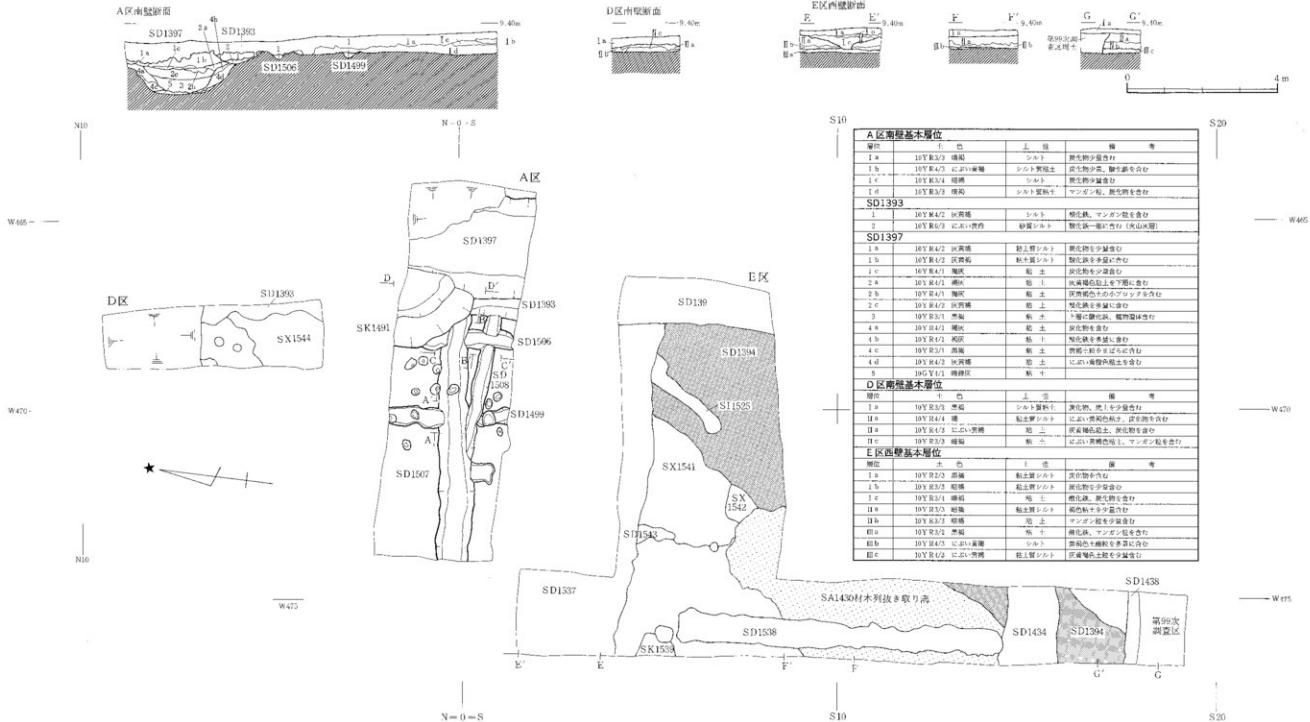
| SD1508 | | | |
|--------|-------------|---------------------------|----|
| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
| 1 a | 10YR4/7 反青面 | 粘土質シルト | |
| 1 b | 10YR4/7 反青面 | シルト質粘土 にぶい黃褐色シルト質粘土を含む | |

第33図 SD1507・1508溝跡断面図



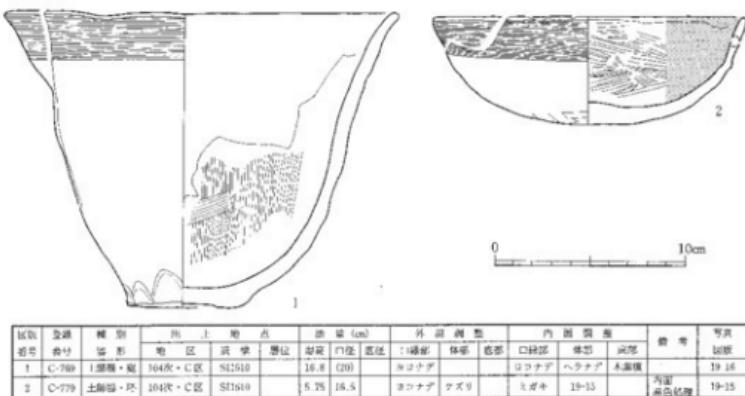
| SK1491 | | | |
|--------|----------------|------------------------|----|
| 層位 | 土色 | 土性 | 備考 |
| 1 a | 10YR4/7 反青面 | シルト質粘土 鐵化鉄を多量に含む | |
| 1 b | 10YR3/7 壊場 | シルト質粘土 マンガン鉄、褐色土を含む | |
| 2 a | 10YR4/7 反青面 | シルト質粘土 鐵化鉄を斑状に含む | |
| 2 b | 10YR3/7 壊場 | シルト質粘土 鐵化鉄を含む | |
| 3 a | 7.5Y4/1 オーリープ面 | 粘土 鐵化物、マンガン鉄を少量含む | |
| 3 b | 7.5Y4/1 底 | 粘土 鐵化物を少量含む | |

第34図 SK1491土坑断面図



第35図 第104次調査区A・D・E区平・断面図 (1/100)

る。東辺での方向はN-42°-Wで、北西壁中にカマドが位置し、カマドの周辺に焼土や炭化物の集積する箇所がある。



第36図 SI 1510竪穴住居跡出土遺物

遺物はカマド前面より土器C-770環（第36図2）、南壁ぎわよりC-769甌（第36図1）が出土している。

S X 1532を切っている。

S I 1515竪穴住居跡 調査区の南端で煙道の一部と住居跡の北東隅を検出した。東西2.92m以上、南北0.76m以上で、方向はN-31°-W程と推定される。カマドは北西壁中に位置するが、詳細については不明である。

S X 1532を切っている。

S I 1520竪穴住居跡 調査区の北端で住居跡の南西隅を検出した。東西1.66m以上、南北1.20m以上で、方向はN-41°-W程になるものと推定される。詳細については不明である。

○E区

S A 1430木材列抜き取り溝跡 上幅228cm以上の溝跡であるが一定せず、調査区の西端からN-26°-E方向に7.8mほど延び、途切れています。検出位置や遺構の重複関係からみて、昨年度の第99次調査で検出されたS A 1430木材列抜き取り溝跡の延長と考えられる。

S D 1394溝跡、S X 1541・1542を切り、S D 1434・1438・1538溝跡に切られている。

S D 1394溝跡 上幅356cm以上の溝跡を10.6mにわたり検出した。方向はN-34°-Eでさらにも北東に延びている。検出位置や遺構の重複関係からみて、昨年度の第99次調査で検出されたS D 1394溝跡の延長と考えられる。

S A 1430木材列抜き取り溝跡、S D 1393・1397・1434・1438・1537溝跡、S I 1525竪穴住居

跡に切られている。

S D1434溝跡 上幅124～152cm程の溝跡を、調査区の南端部で1.9mにわたり検出した。方向はE-2°-Nである。検出位置からみて昨年度の第99次調査で検出されたS D1434溝跡の延長と考えられる。

S A1430材木列抜き取り溝跡、S D1394溝跡を切り、S D1538溝跡に切られている。

S D1438溝跡 上幅28cm以上の溝跡を、調査区の南端部で1.9mにわたり検出した。方向はE-4°-Nである。検出位置からみて、昨年度の第99次調査で検出されたS D1438溝跡の北半部にあたると考えられる。昨年度検出した南半部と合わせるとこの溝跡の上幅は1.48mとなる。

S D1394溝跡を切っている。

S D1537溝跡 上幅256cm以上の溝跡を、調査区の北端部で8.8mにわたり検出した。方向はE-2°-Sである。A区ではこの溝跡の北辺にあたるものが検出されていないことから、上幅は最大でも360cm以内と推定される。

S D1394・1543溝跡、S I 1525豎穴住居跡、S X1541を切り、S D1393溝跡に切られている。

S D1538溝跡 上幅50～86cm以上の溝跡を、調査区の西半部で8.6m程にわたり検出した。方向はN-4°-Wである。

S A1430材木列抜き取り溝跡、S D1434溝跡を切っている。

S I 1525豎穴住居跡 調査区の北東半部に煙道の一部のみを検出した。煙道の方向はN-30°-Eで、残存長2.2m程である。壁の周辺は焼けた痕跡が明瞭である。

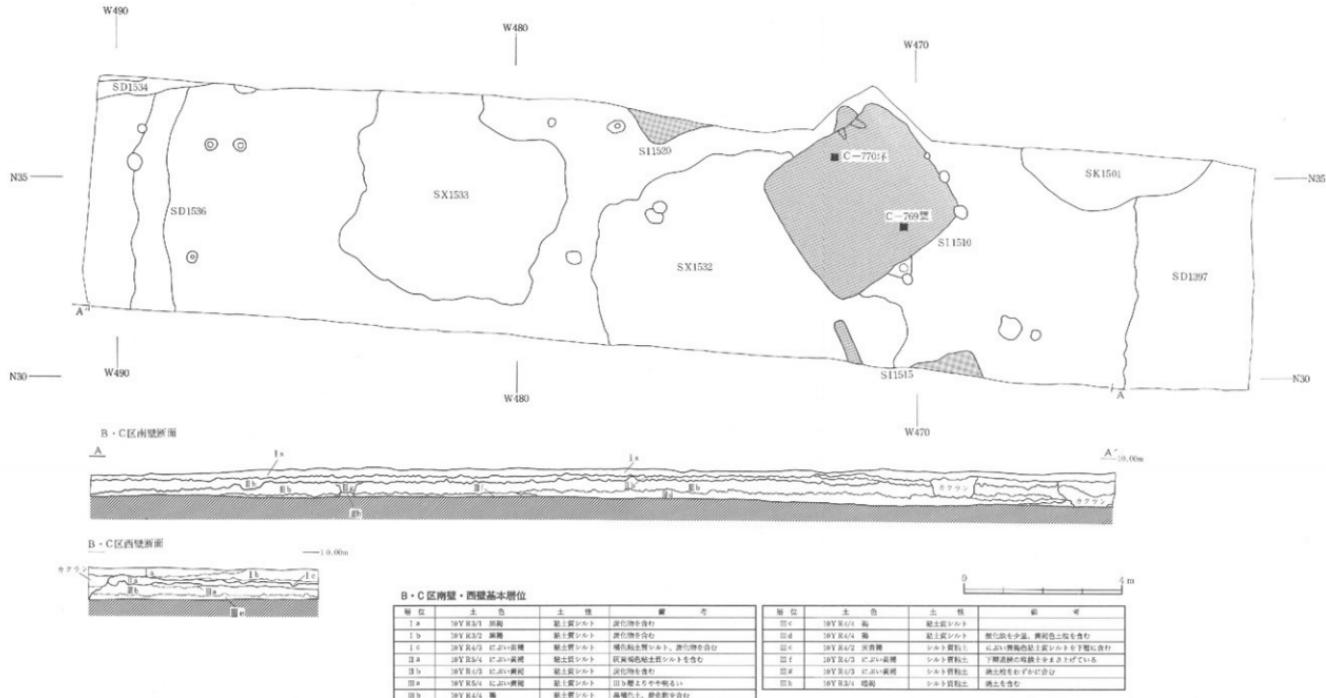
S D1394溝跡を切り、S D1537溝跡に切られている。

3. まとめ

今回の調査では、豎穴住居跡4軒、溝跡14条、土坑3基などが発見された。それらのうちほとんどの遺構は、確認にとどめている。よってここでは問題点をまとめておきたい。

(1) S A1430材木列抜き取り溝・S D1394溝跡について

昨年度検出されたS A1430材木列の延長線上で2条の溝跡が確認された。これらは検出位置や規模、またその方向からS A1430材木列抜き取り溝とS D1394溝跡の延長部と判断した。昨年度の調査結果から、S A1430材木列はI期官衙の南西域における西辺を区画する材木列と考えられた。また、材木列と同位置ではS D1394・1429溝跡と重複しており、ある時期の区画が溝によるものであることも想定された。今回検出されたS A1430材木列抜き取り溝は、緩やかに弯曲しながら北東に延び、途切れている。途切れた箇所では門や櫓などの施設は確認されなかった。しかし、材木列より古い時期の区画と考えられたS D1394溝跡は、調査区を通過することが確認された。



第37図 第104次調査区B・C区平・断面図 (1/100)

(2) S D 1397溝跡について

S D 1397溝跡は、今回の調査区のA・D区において確認された。昨年度検出分と合わせて、N-3~4°-W方向に65m程を確認したことになる。この溝跡は上幅が2.2~2.5m以上、深さ1.2m程であり、規模からみればII期官衙外郭大溝と比較しても遜色のないものと考えられる。遺構の年代については、遺物の出土が少ないため明らかではなが、この溝跡を切って構築されているS D 1393溝跡の第2層には灰白色火山灰が堆積している。この灰白色火山灰が10世紀前半に降下したとみられているため(註11)、S D 1393溝跡の年代は概ね10世紀前半とみることができる(註12)。よってこのS D 1397溝跡については、それより遅る時期と考えられる。II期官衙外郭大溝の最上層にもこの灰白色火山灰が検出されている箇所があり(註13)、同じような状況を呈している。このようなことからS D 1397溝跡とII期官衙外郭大溝とが、ある時期とともに存在していたことも想定される。しかしS D 1397溝跡については、堆積状況が底面から自然堆積であり、遺物の出土量も少なく外郭大溝とは違いがみられる。外郭大溝との位置関係や、両溝の間における遺構の様相とともに注目していきたい。

(3) S I 1510竪穴住居跡について

S I 1510竪穴住居跡からは、土師器C-770壺と769甕が出土している。いずれも遺構検出面から出土である。C-770壺は内面黒色処理され、製作にはロクロを使用していない。体部外面の中央よりやや上に段を有し、内面に軽い稜がつく。底部は丸底のものである。これは、第4次調査のS D 35溝跡第1層出土の土師器壺類と比較すると、やや器高が高く丸底である点や段のめぐる位置が高いこと、内面に稜がつく点などに古い要素が認められる。またC-769甕は、口縁部に最大径を有し、底部から口縁部まで緩やかに外傾する。口縁部と体部の境には段がみられず、口縁部にはヨコナデ調整が施されるのみである。体部の調整においてはハケメ調整が明瞭な土師器甕とは、違いがみられるものである。このような土師器甕は、形態的には渠遺跡第12・19号住居跡などに類例をみることができる(註14)。しかし、外面のハケメ調整が明瞭でない点に違いもあり、やや後出的と考えられ、ここでは7世紀後半代のものとみておきたい。

この竪穴住居跡が官衙に伴う遺構であるかについては、I期官衙に伴う住居跡とは方向において違いがあり即断はできない。また、本遺跡の西に隣接する長町駅東遺跡(註15)では、7世紀後半から8世紀までの竪穴住居跡が15軒以上発見されており、集落を形成していたとみられている。これらの住居跡は年代的には本遺跡の住居跡と大きく異なるものではないが、方向については官衙の方向に規制されず、不揃いであることが指摘されている。したがってS I 1510竪穴住居跡は、官衙の西域に広がる集落に含まれる可能性を考えておきたい。

VI 第105次発掘調査

1. 調査経過

第105次調査は、仙台市太白区郡山3丁目24-15庄子都代子氏より郡山3丁目3-4において、共同住宅新築に伴う発掘届が平成6年8月23日付けで提出されたため実施した。第105次調査区は方四町II期官衙の東辺材木列上、推定東門の南に隣接している。当市教育委員会では試掘調査により表土の厚さを確認し、遺構の検出面まで共同住宅の基礎が達しないよう指導したが、II期官衙推定東門ときわめて近接しているため敷地内で発掘調査を実施した。発掘調査は平成6年10月4日から10月31日にかけて、4×10mの調査区を設定して行った。

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、材木列1条、竪穴遺構1基、土坑2基、溝跡3条、ピットなどである。遺構は以前に同じ敷地内にあった住宅にかかわる配管やゴミ穴により削平を受けている。

S A 1530材木列 南北方向に延びる材木列で、方向はN-6°-Wである。検出した長さは4m程で、布堀りの上幅が240cm、深さは残存状況の良好な箇所で130cmである。布堀りの西壁際に直径9~18cmの柱痕跡が並んで検出された。柱痕跡は布堀り底面に近くになると直径が20cm程度となり、柱の設置されるところが溝状に35cm程度さらに深くなっている。埋土は黄褐色・灰白色シルト質粘土・褐灰色・黄色粘土などである。

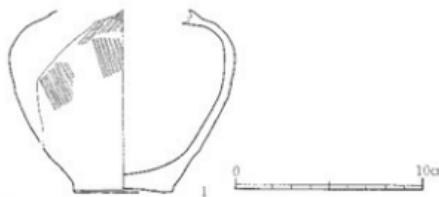
遺物は埋土中より土師器の壺・甕の小片が多量、須恵器の壺・高壺の小片が少量出土している。

S D 1552溝跡、S K 1514土坑を切り、**S D 1516溝跡**に切られている。

S I 1517竪穴遺構 東西4.1m以上、南北1.7m以上で、南辺での方向はE-7°-Sである。なおこの遺構は確認したにとどめている。



第38図 第105次調査区位置図



| 形態 番号 | 地盤 番号 | 種別 的形 | 出 地 | | 法 量 (cm) | 外 周 長 度 | | 内 周 長 度 | | 標示 記録 | |
|----------|-------------------|----------|---------|-----|----------|---------|-----|---------|-----|----------|----|
| | | | 地区 | 通 構 | | 海抜 | 高さ | 底径 | 口縁部 | | |
| 1 | C-771 十郎御 塚 | 165X | SI 1517 | | 3.71 | | 5.4 | ハケメ | ナダ | | ナダ |

第39図 SI 1517竪穴住居跡出土遺物

遺物は堆積土の上面から体部外面でハケメ調整の顕著な土師器C-771壺(第39図1)や、土師器壺片が少量と須恵器の壺底部片が2点出土している。

S D1553溝跡を切り、S K1554土坑に切られている。

S K1514土坑 直径100cm以上のやや歪んだ円形の土坑と推定される。この遺構は確認したにとどめている。

遺物は土師器壺片が少量と須恵器片が3点出土している。

S A1530材木列に切られている。

S K1554土坑 長軸90cm、短軸70cmのやや歪んだ不整形の土坑である。この遺構は確認したにとどめている。

S I 1517竪穴遺構を切っている。

S D1516溝跡 上幅110cm以上、底面幅60cm以上、深さ60cmの溝跡で、断面形は扁平なU字形である。方向は真北方向と推定される。堆積土は3層に大別され、暗褐色シルト質粘土、灰黃褐色粘土、褐色シルト質粘土などである。

遺物は土師器片が少量出土している。

S A1530材木列を切っている。

S D1552溝跡 上幅50~75cm以上の溝跡で、方向はN-24°-Eである。この遺構は確認にとどめている。

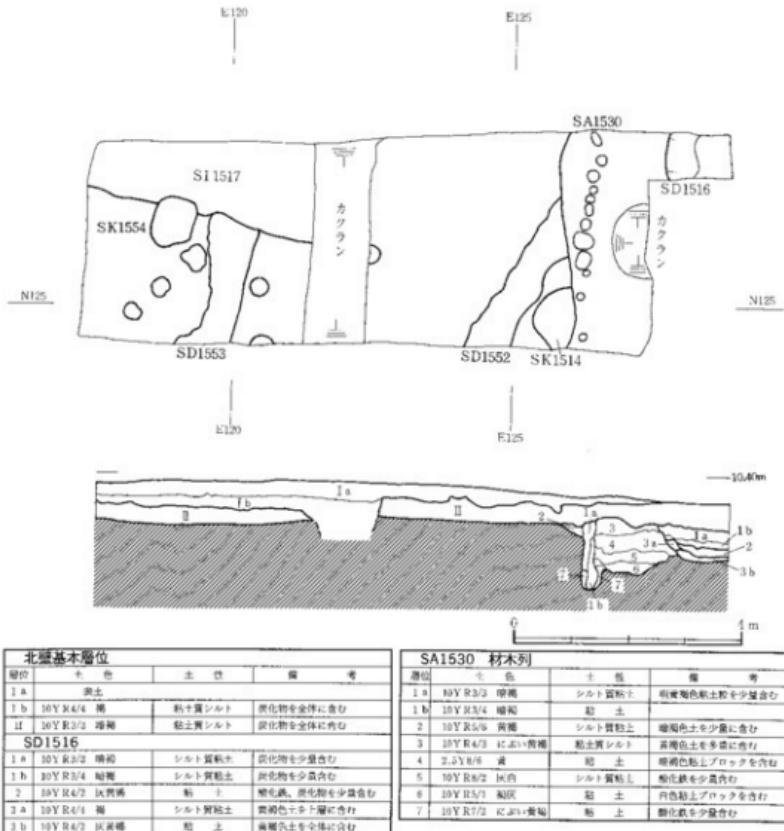
S A1530材木列に切られている。

S D1553溝跡 上幅55~90cm以上の溝跡で、方向はN-4°-Eである。この遺構は確認にとどめている。

S I 1517竪穴遺構に切られている。

3. まとめ

今回の調査では想定された位置から、II期宮衙の外郭東辺となるS A1530材木列が発見された。しかし東門に関わる遺構は発見されなかった。



第40図 第105次調査区平・断面図 (1/100)

S A1530材木列はこれまでの調査で発見されている材木列と、材木の設置の仕方でやや異なっている。これまでのII期官衙東辺での調査（第11、18、69次）では、材木列の布掘り掘り方の上幅が60~80cmで、その中央に直径20cm前後の柱材が検出されていた。S A1530材木列は材木の痕跡が西壁に寄って検出されており、掘り方も底面近くになって西壁ぎわが一段深くなっている。仮に材木がそのまま立ち上がったとすれば、地上に立ち並んだ際の外観には、これまでの調査で検出した材木列と大きな違いはなかったと考えられる。しかし上部構造に変化がないとしても、地中の設置の仕方が地点によっては違うということが明らかになった。このことが何に起因したのかは、現時点では明らかにすることは難しい。これについては、他の地区での調査成果の蓄積を待って検討したい。

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

| 年月日 | 行事名称 | 担当職員 | 主催 |
|-------------|-----------------------------|-------|-----------|
| 6. 9. 20 | 遺跡見学 | 長島・熊谷 | 仙台市立郡山中学校 |
| 12. 10 | 宮城県内発掘調査成果発表会 | 長島・熊谷 | 宮城県教育委員会 |
| 7. 2. 25~26 | 第20回古代城柵官衙遺跡検討会 | 長島・熊谷 | |
| 3. 25 | 第4回仙台市史セミナー 「ふたりが語る郡山遺跡」 | 白鳥 | |

2. 調査指導委員会の開催

第23回 郡山調査指導委員会 平成7年3月7日 北庁舎4F第1会議室

- 平成6年度の調査成果について
- 平成7年度の調査計画について
- 第3次5ヶ年計画の総括について
- 第4次5ヶ年計画について

3. 資料の貸し出し

仙台市博物館 常設展 「原始・古代・中世」

松山町ふるさと歴史館 企画展 「瓦生産からみた多賀城創建期とその前後」



VII 総括

今年度は第3次5カ年計画の5年次にあたり、当初はII期官衙と同時期の郡山廃寺の中枢伽藍東部の調査予定であった。仙台市の進める再開発事業の範囲がI期官衙の南西部に及ぶことが明らかとなつたため、早急に遺跡の内容を把握する必要が生じた。当初の調査地区を変更して第103次と第104次調査として実施した。またII期官衙内部の調査についても、政庁の範囲確認と建物配置の解明を目的に第102次調査として実施した。さらに年度途中、II期官衙外郭東辺にかかる地区で共同住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、第105次調査として実施した。この他に国庫補助事業ではないが市道拡幅に伴って第101・106次調査を実施した。

第103次、第104次調査では昨年度に引き続き、主にI期官衙の西辺と考えられる遺構を検出した。第102次調査ではII期官衙政庁に関わる掘立柱建物跡を検出し、建物の重複関係から政庁内での建物の変遷について新たな手がかりが得られた。第105次調査では推定位置からII期官衙の外郭東辺の材木列が発見された。

1. I期官衙の調査

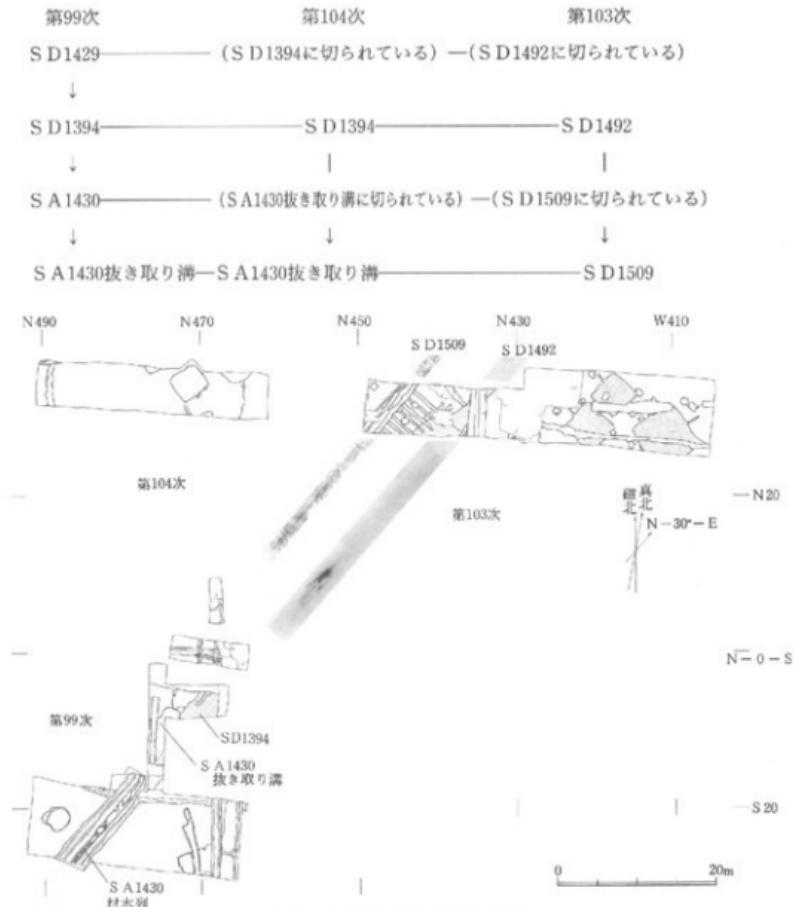
I期官衙の西辺では昨年の第99次調査区で溝跡2条、材木列1条、材木列抜き取り溝1条(S D1429→S D1394→S A1430→S A1430抜き取り溝)が発見された。これらの遺構は重複しており残存状況が良好ではなかったが、I期官衙西辺の区画施設が溝跡2時期→材木列1時期の併せて3時期にわたることが明らかになっていた。今年度は第103次、第104次調査として、I期官衙の西南部での区画施設の内外の様相を明らかにする目的で調査を実施している。

第99次調査と隣接した第104次調査では、S D1394溝跡が調査区を横断し、さらに北に延びていた。そしてその延長部と考えられるS D1492溝跡が第103次調査区でも発見されている。ただし第99次調査区でS D1394溝跡に切られるS D1429溝跡は、第103次調査区では検出されなかつた。第99次調査区においては、S D1429溝跡はS D1394溝跡に比べると浅く、重複が著しい箇所では新しいS D1394溝跡しか検出されないとところもある。そのために第103次調査区でも発見されなかつたものと考えられる。

S A1430抜き取り溝はやや西に寄りながら第104次調査E区の途中で途切れていた。第99次調査の北縁の部分で検出されたS A1430抜き取り溝も、西に向かってやや方向が変わり始めていた。これはS A1430材木列の方向が微妙に変化しているためと推定され、その材木列を溝状に掘って抜き取るとすれば、抜き取り痕跡も西に寄るような形状を呈したのであろう。また途切れた部分では抜き取りだけなく材木列も途切れており、第104次調査区のA、D区では材木列も抜き取り溝も発見されなかつた。しかしその北方の第103次調査では、材木列抜き取り痕跡と

考えられる S D1509溝跡を検出している。調査区の中で材木痕跡が検出されなかったが、底面の形状などから通常の溝跡とは考え難く材木列の抜き取り痕跡と判断した。このような遺構の形状や配置から、S D1509溝跡は第99次調査で検出した S A1430抜き取り溝に対応する遺構と考えられた。

したがって昨年の第99次調査と今年度の第103次、第104次調査の3地区での発見遺構については、次のように整理される。



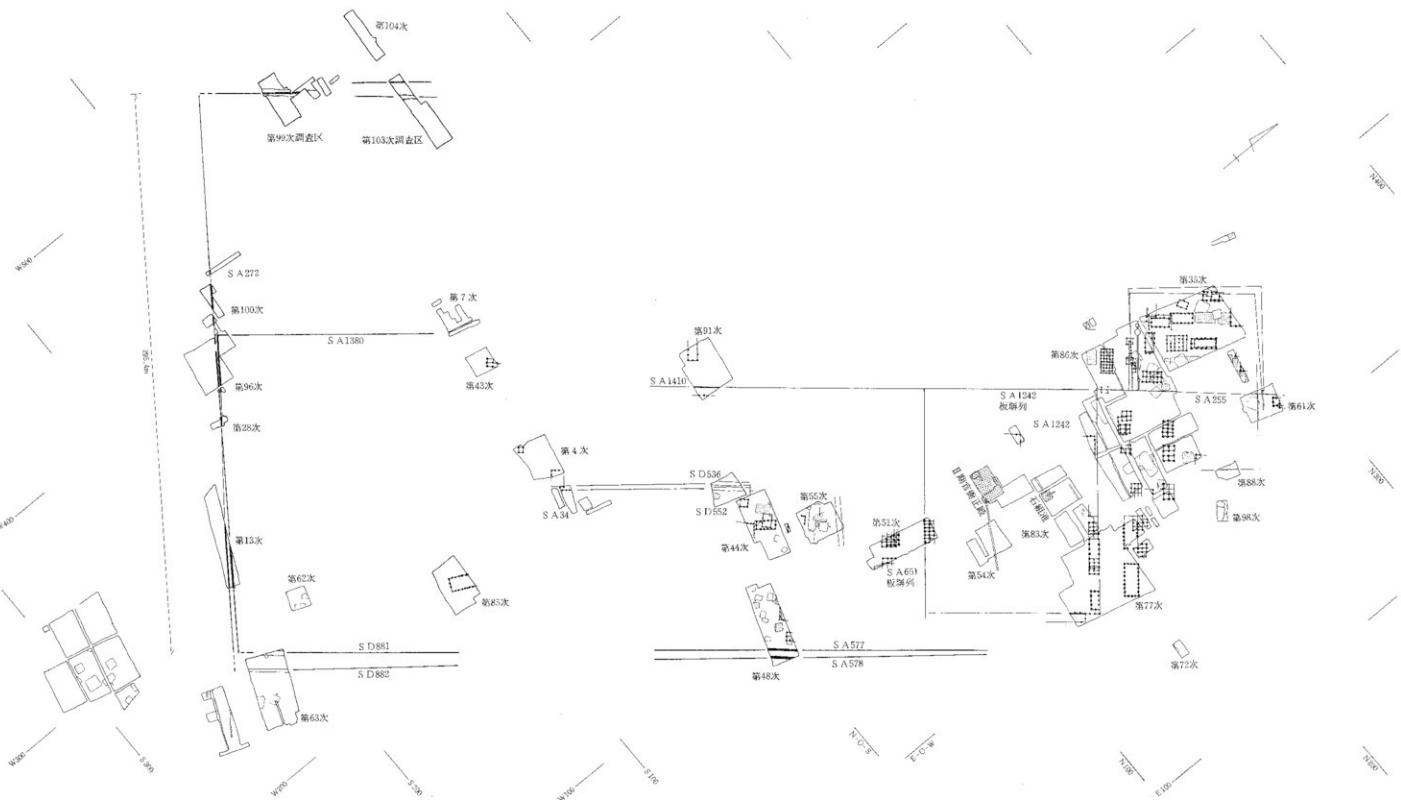
第41図 I期官衙西辺遺構配置図

またこれらの区画施設の内外の様相については、第103次、第104次調査区とともに竪穴住居跡が発見されている。官衙内部と考えられる第103次調査の東半で検出された3軒の竪穴住居跡のうち、S I 1475・1480はI期官衙に伴うものと考えられた。これまでI期官衙の内部では掘立柱式の建物と並列するように竪穴住居や竪穴建物が建てられ、官衙内で機能していたことが明らかとなっている。さらに竪穴住居だけが集中するブロックなどがあることも明らかになっている(註16)。したがって掘立柱建物跡の検出はなかったが、I期官衙の西南端における竪穴住居による何らかの官衙ブロックと推定しておきたい。

今年度の調査成果を検討したところ、昨年度報告したI期官衙についての造構配置や距離関係について若干の補足と修正をする必要が生じた。平成5年度調査概報「郡山遺跡XIV」の第40図を第42図に、第41図を第43図に差し替え、I期官衙南端での東西幅実数距離についても計測値を再検討した結果、322.11mとしていたものが295.4mとなった。計測値をもとにI期官衙について令大尺や令小尺による検討を加えていたが、今回は事実関係についての変更を報告するにとどめ、尺数による官衙全体の検討は、今後の課題としておきたい。



第42図 I期官衙南部造構配置図



第43圖 I期官衙全體圖

2. II期官衙の調査

(1)推定政府の区画について

第55次調査で検出されたS A730一本柱列は、建物跡になる可能性をふまえながらも、推定政府域の西限となる遺構と考えてきた。また推定政府域の南限は、第55次調査区と第44次調査区の間を東西に通る市道敷内に入るものと想定された。今年度、この市道の一部拡幅工事に伴って第101次発掘調査を行っている(註17)。その結果、S A730一本柱列の延長と考えられる柱穴を、G区において1基検出した。またこれがF区までは延びていないことも確認されている。今回新たに検出した柱穴でS A730一本柱列が東に直角に屈曲するとすれば、G区の東端において検出されたはずである。また、さらに1間分南に延びて直角に屈曲するとすれば、第102次調査区において検出されることが想定された。しかし今回どちらかの調査区においても、政府域の南限を区画する遺構は検出されなかった。これらのことからS A730一本柱列および政府域の南限を区画する遺構については、次年度以降の調査の成果を待つて再検討する必要がある。

(2)推定政府周辺の建物跡について

第44図は、方四町II期官衙域の中でII期官衙の遺構について、方向を示した模式図である。これをみるとII期官衙域の遺構には、大きく真北(真東西)かそれよりやや東(南)に偏するものと、真北(真東西)からやや西(北)に偏するものがみられる。これらのうち推定政府周辺の建物跡の方向について整理すると、次のようになる。

| | | | |
|------------|--------------------|-----------|---------------------|
| S B1250建物跡 | N - 1° - E (第83次) | S B652建物跡 | N - 4.5° - W (第83次) |
| S B1210建物跡 | N - 2° - E (第77次) | S B777建物跡 | N - 3° - W (第83次) |
| S B 526建物跡 | N - 3° - E (第44次) | S B638建物跡 | E - 3.5° - N (第83次) |
| S B 302建物跡 | E - 0° - S (第86次) | S B699建物跡 | E - 3° - N (第83次) |
| S B 716建物跡 | E - 2° - S (第55次) | S B434建物跡 | E - 2° - N (第83次) |
| S B1490建物跡 | E - 3° - S (第102次) | S B435建物跡 | E - 2° - N (第83次) |
| S B1465建物跡 | E - 3° - S (第101次) | S B793建物跡 | E - 2° - N (第83次) |

「真北(真東西)かやや東(南)に偏する建物跡」(以下「N-E群」と記すが、便宜上の読み換えである)についてみていく。これらのうち、S B716建物跡とS B1490建物跡については、II期官衙推定中軸線をはさんではほぼ等距離にあり、北桁列の柱筋がほぼ揃っている。また推定中軸線上に位置するS B1250建物跡(政府正殿)との配置関係も整然としている。

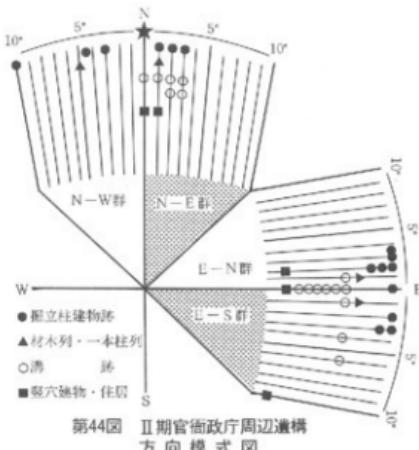
S B1210建物跡の東柱列から官衙推定中軸線までは約57.4m、S B526建物跡の西柱列からは約58.8mでありほぼ等距離にある。

S B1465建物跡は一部のみの検出であり詳細については不明であるが、南北棟建物跡と考えられる。この建物跡はS B526建物跡と方向や梁行の間数が同じであり、桁列の柱筋もほぼ揃うものと考えられる。また南梁列とS B716・1490建物跡の北桁列の柱筋がほぼ揃っている。

これらのことからN-E群建物跡は、同じ配置計画の下に整然と配置された可能性が高いと考えられる。しかし、これらの建物がすべてII期官衙の造営当初から存在したかどうか

かについては、なお詳細な検討を要する。また、S B1210建物跡は、II期官衙推定政府域の東限付近に位置している。さらに官衙推定中軸線をはさんではば等距離には南北棟のS B526・1465建物跡が存在する。S B1210建物跡は、桁行の総長が18.3mで周辺の中では最も長大な建物である。このような長大な建物跡は、官衙において中枢部を取り囲んでいる場合もあり（註18）、II期官衙政府域の区画と合わせてさらに検討を要する。

次に、「真北（真東西）からやや西（北）に偏する建物跡」（以下「N-W群」と記す）についてみていく。第51次調査で検出されたS B638とS B699建物跡は、その配置関係から同時期のものと考えられている（註19）。これらの建物跡は、S B1250建物跡やII期官衙外郭などと方向が異なることはこれまで指摘されていた。しかし、方向の違いが時期差によるものかどうかは不明であった。今回の第102次調査においては、真北方向のS B1490建物跡を切ってS B1485建物跡が検出された。S B1490建物跡は最終段階で抜き取りを受けており、これを取り壊してS B1485建物跡が建てられたものとみられる。また前述のとおり、N-E群の建物跡がきわめて整然と配置されていることに着目すれば、これらのN-W群建物跡がN-E群の建物跡と、すべて同時期に存在したとは考えにくい。少なくともS B1485とS B1490建物跡については、同時期でないことが明らかであり、N-W群建物跡は、II期官衙造営当初の基準方向とは異なる方向で、後から建てられた建物群とみられる。しかし、N-E群建物跡の中にはS B1250建物跡のように抜き取りを受けていないものもあり、N-W群のS B638・699建物跡とある時期に同時に存在した可能性も否定できない。ここでは、推定政府域内の建物群に時期差のあることが判明したが、その変遷については今後の検討課題としておきたい。



第44図 II期官衙政府周辺遺構
方向模式図



图4-5 Ⅱ期官舍中央厅主要构件配置图(1/500)

VIII 第3次5カ年調査の総括

昭和55年度から開始された「郡山遺跡範囲確認調査」も第2次5カ年計画事業が平成元年度に終了し、第1次から第83次までの調査を実施した。国庫補助事業によって調査された総面積は20,944m²である。これに引き続き平成2年度から平成6年度にかけて第3次5カ年計画が立案された。

表1 第3次5カ年計画

| 調査年次 | 調査地区 | 調査予定面積 |
|-------|------------|---------------------|
| 平成2年度 | I期官衙推定中枢地区 | 700m ² |
| 〃3年度 | II期官衙南西部 | 700m ² |
| 〃4年度 | II期官衙南東部 | 700m ² |
| 〃5年度 | 郡山廢寺中枢伽藍東部 | 700m ² |
| 〃6年度 | 〃 | 700m ² |
| 計 | 5地区 | 3,500m ² |

以上の計画について平成元年度の郡山調査指導委員会で了承を得て、実施に移された。しかし仙台市が進める大規模な再開発事業である「長町地区新都市拠点整備計画」が、郡山遺跡の西部にも及ぶ可能性が出てきた。これにより今まで明らかになっていないI期官衙の南西部部分の範囲を早急に明らかにする必要が生じたことから、3年次目の平成4年度以降は計画を変更し、主にI期官衙関連の調査を実施した。

表2 第3次5カ年調査実績

| 調査年次 | 調査地区 | 調査面積 |
|-------|----------------|---------------------|
| 平成2年度 | II期官衙中央北地区等4地区 | 1,257m ² |
| 〃3年度 | II期官衙南西地区等3地区 | 1,223m ² |
| 〃4年度 | I期官衙南西地区等3地区 | 666m ² |
| 〃5年度 | I期官衙南西地区等3地区 | 590m ² |
| 〃6年度 | I期官衙西地区等4地区 | 820m ² |
| 計 | 17地区 | 4,556m ² |

I期官衙については平成4年度以降の調査で南西部における様相が明らかになってきた。第96次調査では二時期の材木列がI期官衙の南を区画しており、これまでの調査も含めて再検討した結果、これと同様に東も区画されていたと推定した(註20)。しかし西辺部の第99次、第103次、第104次調査ではやや規模の大きい溝跡が二時期あり、最終時期のみ材木列となっていた。出土した遺物からはI期官衙の中枢と考えられる第24次、第35次調査などで検出したブロック

の遺構よりはやや新しい年代が考えられる(註21)。それが区画された各ブロックごとの建物跡の方向や、遺構の重複回数の違いとなって現れている。やや規模の大きい溝跡や小規模な材木列によって区画されたブロックが連結するよう拡大したためと考えられる。このようなⅠ期官衙の造営のあり方が、中枢部と西南端での造営時期の違いとなっているのではないかと考えられる。

Ⅰ期官衙中枢においては第86次調査で検出されたS A1242板塀列が、これまでの第51次、第77次、第83次調査によって発見されている板塀列と同じ遺構の一部と考えられる(第43図参照)。それにより東西120m、南北89.6mの範囲を区画している。区画された内部の様相は第54次、第83次調査によって板塀列に取り付くよう、あるいは接するように建物が配置されている。Ⅱ期官衙政府の中心である正殿や石組池と重複する位置にあたり、内部構造のあり方が注目される。また第91次調査で検出したS A1410材木列は、第24次、第61次、第86次調査で発見されたS A255材木列の延長線上で検出されている。末調査の部分が約200mあり連続する同一の遺構か連続できないが、官衙内での重要な区画基準となっている可能性が考えられる(註22)。先に指摘したS A1242板塀列も、この線上で「」字に曲がり重複している。この区画基準で連結したブロックがⅠ期官衙創建時の規模や年代、内部構造を検討する上で重要であると考えられる。

Ⅱ期官衙に関しては平成2、3年度に第86～88次、第91次調査で、Ⅱ期官衙内部の調査を実施した。しかし発見された遺構はほとんどがⅠ期官衙の遺構であった。また当初予定していたⅡ期官衙南東部の調査も実施されなかったため、Ⅱ期官衙の政府以外での建物配置やそれらの果していた機能などは明らかにできなかった。Ⅱ期官衙の政府については小規模な発掘調査ながら第102次調査で、政府の区画と考えていた一本柱列が検出されなかった。政府の区画施設について再検討をする必要があろう。また同じ第102次調査で、真北方向の建物跡が磁北方向に近い建物跡により切られていた。政府の建物が二時期にわたることが考えられていたが、方向により変遷が捉えられる可能性が見い出せた。Ⅱ期官衙の外では第96次、第100次調査により小規模な材木列によって区画された、総柱や床東をもつ建物跡など倉庫風の建物によって構成される新たな官衙ブロックが発見された(これ以降「寺院西方建物群」と呼ぶ)。これまでⅡ期官衙の内部では総柱建物跡が1棟しか発見されていないことを考えると、Ⅱ期官衙の果していた機能を考える上で重要であろう(註23)。

第3次5カ年調査の終了にあたって残された課題について触れておく。当初予定された計画の中では、Ⅱ期官衙南東部や郡山廃寺中枢御藍東部の調査が実施されなかった。遺跡内での急速な宅地化を見ると、次期5カ年計画の中では急ぎ調査されねばならないと考えられる。しかしこれまでの調査で出された成果についても、再検討せねばならない点がある。とくにⅡ期官衙の政府の範囲や内部構造については改めて、検討し直させねばならない。また遺構の変遷や

詳細な年代の検討のためには、これまでの調査で発見された遺構の集成や、I期・II期官衙の創建、廃絶などの定点となる遺物の抽出に努めねばならないと考える。それらの検討と新たな調査成果があって、I期・II期官衙の性格など郡山遺跡の解明がなされると考えている。このような数々の課題が残っていることから、今後とも継続的な調査・検討が必要であろう。

註

- 註1 宮城県文化財調査報告書77集「東北新幹線関係遺跡調査報告書—V—」1981 (1)清水遺跡第IV群土器P315~324
- 註2 仙台市文化財調査報告書第43集「柴遺跡」1982
- 註3 仙台市文化財調査報告書第74集「郡山V」1985
- 註4 「VIII 第3次5カ年調査の総括」参照
- 註5 註2と同じ。
- 註6 註1と同じ。
- 註7 仙台市文化財調査報告書第133集「郡山X」1990 P37
- 註8 註1と同じ。 P324~337
- 註9 福島県文化財調査報告書第192集「国道113号バイパス遺跡調査報告IV 第4編 善光寺遺跡」1988
伊東信雄先生追悼考古学古代史論叢「南東北地方における歴史時代の須恵器編年I」木本元治 1990
- 註10 註7と同じ。
- 註11 第4紀研究第29巻2号「東北地方を覆う古代の鉢長質テラフ“十和田一大湯浮石”の同定」山田一郎・井上克弘 1990
- 註12 仙台市文化財調査報告書第178集「郡山XIV」1994
- 註13 仙台市文化財調査報告書第29集「郡山I」1981
- 註14 註2と同じ。
- 註15 仙台市文化財調査報告書第170集「仙台平野Ⅱ」1993
- 註16 仙台市文化財調査報告書第64集「郡山IV」1984、第86集「郡山VI」、第161集「郡山Ⅹ」1992
- 註17 郡山遺跡第101次発掘調査については、平成7年度以降も調査が行われる予定である。本報告は、平成9年度以降の刊行予定である。
- 註18 官衙中枢部が長大な建物で区画される例としては、小郡遺跡(筑後国御原郡衙)、万代寺遺跡(因幡国御原郡衙)、阿造跡(近江国栗太郡衙)などがある。
- 註19 仙台市文化財調査報告書第86集「郡山VI」1986
- 註20 仙台市文化財調査報告書第178集「郡山XIV」1994
- 註21 仙台市文化財調査報告書第169集「郡山XIII」1993
- 註22 仙台市文化財調査報告書第161集「郡山XII」1992
- 註23 註20、21と同じ。

写 真 図 版

図版 1
第102次調査区
全景 西半部
(南より)



図版 2
第102次調査区
全景 東半部
(南より)



図版 3
SI 1495遺物出土状況
C-766壺、C-765甕ほか
(西より)





図版5 S D1502溝跡
遺物出土状況 K-200

図版4 第103次調査区全景
(西より)



図版6 S I 1470竪穴住居跡
床面検出状況
(西より)



図版7 S I 1475竪穴住居跡
床面検出状況
(西より)

図版 8
第104次 A区
調査区全景
(西より)



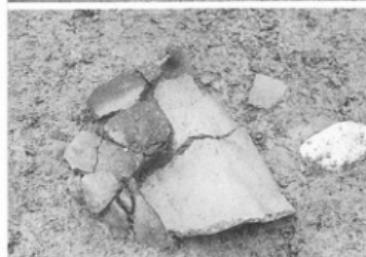
図版 9
第104次 B・C区
調査区全景
(西より)



図版10
S I 1510竪穴住居跡
検出状況
(南より)



図版11 S I 1510竪穴住居跡
遺物出土状況 C-769甕



図版12 S I 1510竪穴住居跡
遺物出土状況 C-770甕



図版13 第104次D区
調査区全景
(北より)



図版14
第104次E区
調査区全景
(北より)



図版15
第104次E区
調査区全景
(北東より)



図版16
第105次調査区
全景（東より）

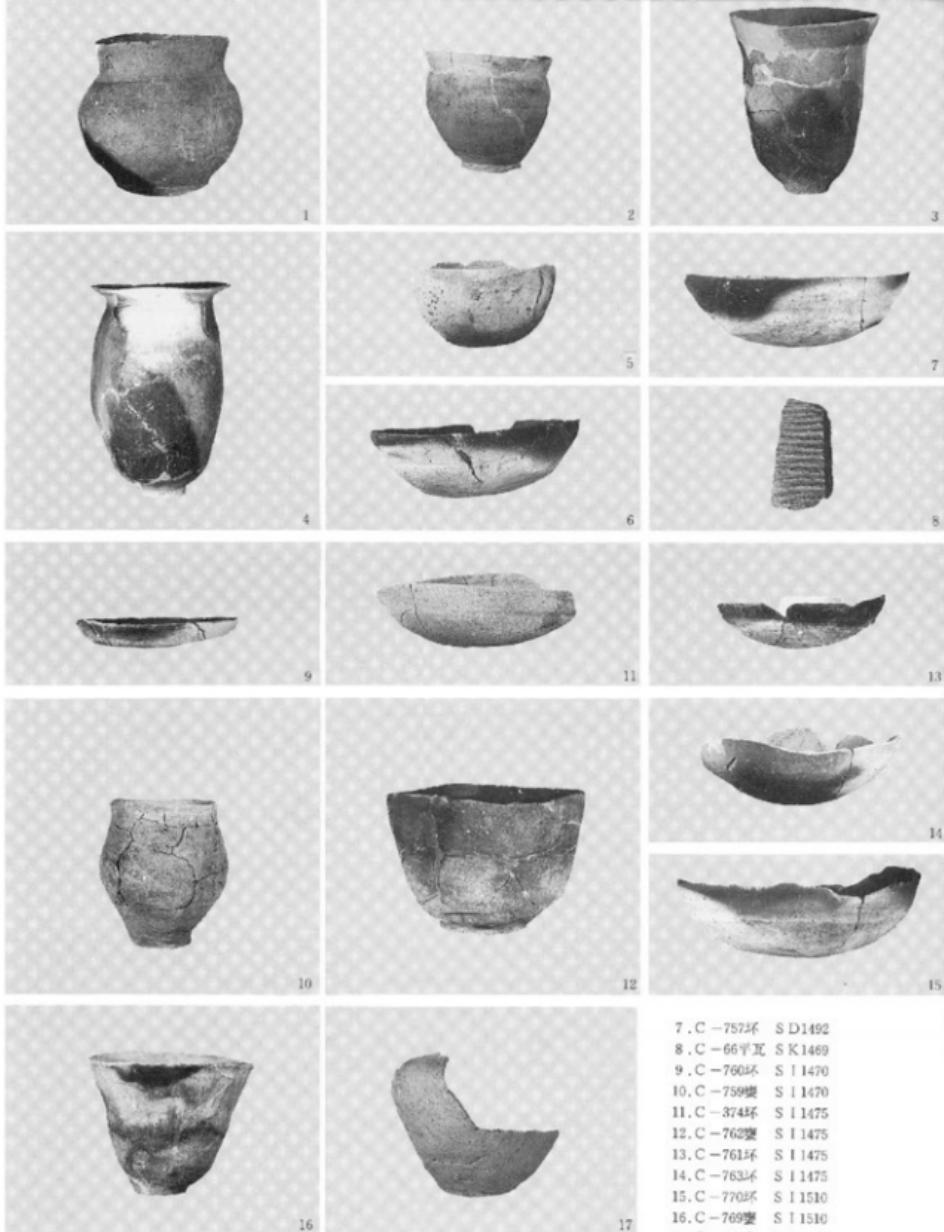


図版17 S A1530材木列
検出状況（南より）



図版18 S A1530材木列
断面（南より）





1.C-766环 S I 1495 4.C-768甕 S I 1495
 2.C-767甕 S I 1495 5.C-756环 S D 1492
 3.C-765甕 S I 1495 6.C-758环 S D 1492

圖版19 出土遺物

7.C-757环 S D 1492
 8.C-66平瓦 S K 1469
 9.C-760环 S I 1470
 10.C-759甕 S I 1470
 11.C-374环 S I 1475
 12.C-762甕 S I 1475
 13.C-761环 S I 1475
 14.C-763甕 S I 1475
 15.C-770甕 S I 1510
 16.C-769甕 S I 1510
 17.C-771甕 S I 1517

報告書抄録

| ふりがな | こおりやま いせき | | | | | | | |
|---------------|---|----------|----------------------|-------------------|--------------------|---------------------------|-------------------|---------------------|
| 唐名 | 郡山遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 平成6年度発掘調査概報 | | | | | | | |
| 巻次 | XV | | | | | | | |
| シリーズ名 | 仙台市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第194集 | | | | | | | |
| 編集者名 | 長島榮一、熊谷裕行 | | | | | | | |
| 編集機関 | 仙台市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214 8893~8894 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 1995年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所載遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東經 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 都山遺跡 | 宮城県仙台市太白区都山三丁目他 | 04100 | 01003 | 38° 13' 13" | 141° 18' 30" | 1994.05.01 ~1994.11.08 | 820m ² | 重要遺跡 の範囲 確認調査 |
| 所載遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 都山遺跡 | 官衙跡 | 古墳 奈良 | 木列 溝跡・土坑 整穴住居跡 | 土師器片 須恵器片 | | | | |

仙台市文化財調査報告書第194集

都山遺跡 XV

—平成6年度発掘調査概報—

平成7年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

印刷(株)東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

